

---

# 遊戯王GX-お気楽小僧の決闘者生活-

時金 成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX・お氣楽小僧の決闘者生活 -

### 【Zコード】

Z2048Y

### 【作者名】

時金 成

### 【あらすじ】

友人宅に泊まり込みで遊んだ翌日、友人宅の居間で起きた俺……

高峰 勝利は遊戯王の世界にやってきていた。友達もかと思つたら、まさかの俺だけっ！？

持つてこれたのは圏外の携帯に遊戯王のデッキが9つとPSPと財布……あ、家はちゃんとあつて良かつた。と思つたら、亡くなつたはずの両親が生きていた！？

と、よくよく体を確認すればなんか縮んでるし！？ え、高校受験？ 遊戯王の世界に来たんならやっぱあそこっしょ！

これは決闘者として有名になり親孝行を目指すぼっちゃんとした少年の話。

## †注意†（前書き）

注意書きです。これは書いた方がいい、これはいらないんじゃない  
か、どう意見がありましたら感想などに書いてください。

検討し、声が多ければ追加・変更・削除します。たまに声がなくとも  
私が追加した方がいいと判断した場合も増えますが、減ることは  
ありません。

### 【シンクロ・エクシーズについて】

原則として 高峰 勝利 ・ 遊城 十代 の敵側のみ。

一口に敵と言つても『TURN-03』で出たようなキャラもいれば、ただ対戦相手という意味のキャラもいます。

### 【タグ：オリジナルカード有りについて】

デュエルでは使いません。ただ、日常の会話などで出たりする程度です。

ただし、TF6に出てる。さらにアニメオリジナルカードは使います。あくまで使わるのは作者である私が考えたオリジナルカードのみです。

### 【時代に合わないカードについて】

基本的にはシンクロ関連とエクシーズ関連は存在しない設定です。

シンクロ・エクシーズ・チューナーとテキストに表記されているカードと、極星・ジャンク・BF・TGなどシンクロに強く関連するカードも同じく。

それ以外の最新のカードは大半が存在している設定です。



クリスマスイヴ……俺、高峰 勝利は友人の家に泊まり掛けで遊びに来ている。互いに彼女なんものはおらず、男一人だけの寂しいイヴだ。何をしているかと言うと。

「速攻魔法サイクロンを発動。俺から見て一番右のカードを破壊」

「チヨーンして呼び声を発動。クリッターを持つてきて呼び声破壊。クリッターの効果で顔を持つてきて、ほれ」

「くわあ、また負けた」

遊戯王カードをやっている。友人は最近新たに組み立てたエグゾディアデッキを使っていて、俺は連敗している。守りのカードが充実していく攻めきれないでいた。もう、やっぱりあのデッキじゃないと駄目か。

「もう一回ーー 今度はこれ使つか」

「ふあ、いや、それ何回だよ。いい加減こいつは寝くなつてきたからもう明日にしろよ」

「へへ、勝ち逃げは許さんからね

もつ午前二時過ぎ。俺もやや眠くなつてゐるから大人しく引き下がる。

「あ、金ちゃん。俺のワビエルと金ちゃんのワイゼル交換してくれない?」

「ワビエルだけじゃなあ……幻銃士付きならいいぞ」

「よし、取引成立!」

こうしてカードを交換するのも金ちゃんだけになつた。他の友人達はもうやめてしまつて……といつよりも疎遠になつて久しい。

「そりいえば高峰。仕事は見つかったのか?」

「うう……まだ」

「おーおー、大丈夫か?」

はあ、嫌な」と思い出させないで欲しい。俺は先週仕事をクビになつた……今、再就職をしようと面接を受けてはいるが不採用ばかり。

くうへ、三十路でクビとか……この不景気な世の中じゃかなり痛い。しかも、よつこもよつて30才になる誕生日にとか。

「セヒ、寝るか。愚痴くらう聞いてやつから元氣だせ」

「お～、恩に着る。あー、でも遊戯王みたいにカードゲームが仕事にあつたらいのに」

「確かにいいよな。だが、所詮一次元だ。地道に探すしかなこと。じゃ、電気消すぞ～」

友達の金ちゃんが電気を消して、口の口は眠りについた。口でもし、あんなことを言わなかつたら……あんなことにならなかつたのかもしけない。

チョンチョンと小鳥がさえずる音で田を覚ました俺はむくつと布団から起き上がる。今何時だろ、と携帯を見れば。

「6時か……あれ、圈外？ なんで？」

携帯が何故か圈外になつていて首を捻つていると、ガチャリと部屋にある扉が開いて、そこから金ちゃんが入ってきた。

「あ、おはよ。金ちゃん」

「はよ、高峰。飯は昨日の残りでいいか?」

「うさ、もうひと

携帯の方は後でいいや。今は朝飯を食べることにしよう。冷えているけど、それでも美味しいご飯を食べながらテレビを見つめていると危険を感じかかるところだった。

「では、次に海馬コープレーショング主催するイベント情報です」

「は?」

「お、待つてました」

俺はポカンと呆けるが金ちゃんは待ちかねたと田を楽しげに細めながらテレビから流れる音を聞き逃さないようにしている。え、ちょい待ち。海馬コープレーショングで遊戯王に出てきた会社だろ?

なんでそれが田覚ましテレビで流れてるんだよ。そして、金ちゃんは不思議に思おうね。というか変なのは俺なのか? ニュースでは海馬コープレーショング主催するイベントについて映像を使いながら紹介しているが、俺は混乱してまともに聞いていない。と、ニュースは次に移った……次は、デュエリスト育成学校の受験申し込み期日が終わるといつものだった。

「あ～、行きたいんだけど受かる自信ないんだよな。高峰は受けるのか？」

「……どうだろ？　就職とか考えたら受けた方が良さげだよね、うん」「

「お前のデュエルの成績じゃ、無理だろ。俺と同じくらいだからな

適当に無難な答えを返していると、金ちゃんの言葉に困惑った。デュエルの成績って、授業に盛り込まれてるの？　ナチュラルに対応してるので、マジで遊戯王カードで遊ぶ仕事があるの？　どうしてこうなった？　というか待て。今ニースでやつてたのは高校だぞ。それに成績つて……そんなことを考えながらカレンダーに視線を向けると、そこには15年前の西暦が書かれていた。

これだと俺、中学3年生？　そういえば金ちゃんをよく観察すれば若干低い？　もしかしなくても若返ったのか？　いや、金ちゃんはそのまんまなんだろうけど。金ちゃんが違和感を感じてないってことは俺は15才の時の姿に戻つたと考えるのが妥当か。

あ～、もう訳分からん。それから俺は逃避をするように遊んだ。15年前だつてのにWi-Fiでスマブラをやつてと。そして、軽くデュエルをした。鞄には30才の俺が使つていたデッキが入つていたが、机には15年前に使つていたデッキが置かれていたのでそっちを使つた。

夢の中の金ちゃんのデッキは俺の知つているデッキとは程遠い構成だつた。俺の方も似たり寄つたりだつたけど、無駄と思うカードを

抜いたらよく回るようになつて24戦19勝と勝ち越した。うん、最近負け続けだつたからなんか嬉しい。

大いに遊んで夕方になつたので家に帰宅しようと金ちゃん家の玄関に今はいる。

「まさか高峰に大勝されるとはな。昨日、お前手加減してたのか?」

「うんにゃ、夢見がよかつたからその通りにしただけ」

「夢でもデュエルつて、お前そこまでがり勉だつたっけ?」

カードゲームでがり勉つて……。俺は苦笑いしてこの日は誤魔化して帰つた。そして、家に帰ると……。

「あ、お帰り馬鹿兄。もつすぐじ飯だから」

「ああ、麻弥。できたら呼んで」

「へへへ」

小生意気な妹に出迎えられて、俺はそそくさと勝利の部屋とプレートがある部屋に入った。そこで俺は鞄を開ける。中からは向こうで確認した通り30才の時に使つていた複数のデッキと微調整用のカード数枚……交換したばかりのワイヤーが入つていた。

シンクロもエクシーズもある。いい加減、目を覚ましてもおかしくはないし、帰り道の時に頬を抓つてみたら痛みがあつたので現実だろう。というかそう想定して行動しないと社長とかペガサスとかに目を付けられる可能性があるし。

絶対にシンクロとエクシーズは使えない。というか、そもそもソリッドビジョンが反応しないだろうし。それにチューナーだったモンスターのテキストからチューナーという文字が消えてるから出せないんだけどね。まあ、星を揃えて出すエクシーズモンスターは召喚できるだらうけど出せた試しがないからな。

それに目を付けられるのは嫌だし、安全に暮らすなら使わない方が吉。俺としては夢落ちを期待したいが、痛みがある時点で無理だろう。どうしてこうなつたんだか知らんけど、人生をやり直す有り得ない機会が得られたんだし、今度は仕事をクビにならないように頑張らないと。

出来たら彼女も作りたいな。昔はゲームに睡眠、食欲にかまけてそういったことに興味無かつたから。ああ、でも太つてたら無理だよなあ。いや、高校で一気に2倍に膨れ上がつたから、今から努力すれば高3の頃にはきっと瘦せてるはず。

よし、目指せスリム勝利……なんか売れない芸人みたいな名前になつたな。さて、危なそうなカードを抜いていくつか組み直さんと。ここが遊戯王の世界ならアカデミア行つた方が将来役立つだろうし、ドローパンを食べてみたいし。

主人公が居たとしても、どうせ俺はモブなんだから危険はないっしょ。あ、でも俺一期しか見てないんだよな。見た一期すら昔過ぎてろくに覚えてないし……確かE・HERO使いでガツチャつて口癖

の奴が主人公だったな。

うし、成績のために徹底研究してあつさり負けないようにしよう。  
ただでさえE - HERO「デッキは苦手なんだしな。要注意は属性ヒ  
ーローだ。他はどうともなるし。

色々考えている内にとある問題のデッキに手を伸ばす。確認せずに  
なんで問題と分かるかは簡単だ。俺のメインその2で、通称邪神デ  
ッキ。その名の通り三邪神が入っているデッキだ。

邪神を出すことに俺なりに特化させたこのデッキは、まさしく邪神  
がエースでありフィニッシュ。邪神が除外されるか墓地に送られ  
れば負け確定のギャンブルデッキ。だけど、勝率がまずまずと当初  
はネタで作ってすぐバラす予定だったのにいつの間にかメインの一  
つになっていた。

金ちゃんから邪神が憑いてるんじゃないかと「冗談で言われたことが  
ある。なんせ、絶対に一度は出るんだもんな。たった一度だけ三邪  
神がフイールドに出揃つたことすらあるし……ただ、その時はイレ  
イザーを狙われて負けちまったけど。

俺としてはまだまだ使いたいのだが、この世界で三邪神を使うのは  
危なすぎる。絶対にペガサスに目を付けられるのは分かり切つてい  
るから。うー、でもバラしたくはないし……うん、これは手付かず  
にして保存しておこう。

デッキケースに丁寧に納めて作業を再開。12個あつたデッキは9

つまで減つた。だつて、しょうがない。減つた3つはシンクロ主軸だつたからシンクロが使えなかつたらパワー不足と硬さ不足で負けるのは目に見えてるし。それにその内の一つは切り札が結束……絵柄的に絶対に使えない。そういえば今更だけど、このデッキにあるカードつてソリッドビジョンに映るんだらうか？

そんな最初に気付いて当然の疑問にぶち当たつた時、階下から俺を呼ぶ声がした。『ご飯が出来上がつたのだろう。ひとまず浮かんだ疑問は置いとして夕飯食べよう。』この問題を解決できるはないかあとで調べないといけないけど。

居間に着いた時に叫ばなかつた自分を褒めたい。そこには4年前に亡くなつたはずの両親が座つて待つていたからだ……いや、15年前だし生きてて当たり前のはず。なんかもう、どうでもいいや。夢だろうとあの時悔いたことをやれるようになつたんだ。なら、夢から覚めるのもやるいとやつてからだ。

「……母さん、父さん。俺、デュエル・アカデミアに行きたい」

そして、プロになつて温泉旅行を家族で行くんだ。俺はそつ心に誓つた。

## TURN-01【vs試験官】（前書き）

第一回目のトヨエルです。間違い、脱字があつたら教えてください

俺が父さんと母さんに「デュエル・アカデミア」に入学したいと伝えると凄まじく驚いていた。妹一人にまで驚かれる俺つて……。

まあ、理由はすぐ判明したんだがな。驚かれた理由は単純で、学校の俺のデュエル成績は学年最下位……しかも、授業にデュエルモンスターズが導入されてからずっと、妹にすら大連敗中らしい。

まあ、あんなゴテゴテしたバランスの悪いデッキ使えばな……最高攻撃力が1500つて。いくらなんでも低すぎだ。金ちゃんのデッキだと出たので1600……どつこいどつこいだった。

俺がまずしなければならないのは学校の成績を上げること。英語以外壊滅的に忘れてしまっていたけれど、デュエル・アカデミアの入試はデュエルに関する筆記と実技だったので上げるのは「デュエルの成績だ。

いきなり強力なカードを入れると不審な目で見られることを想定して、下級戦士のみで構成されたデッキを新たに組んだ。切り札は「マンド・ナイト」。キーカードは一族の結束を含む強化カードだ。

この世界だと攻撃力3000を超える数値は驚愕すべき事柄であることを俺は知らなかつた。それをデュエルする前に知ることが出来たのは運がいいと言わざるを得ない。テレビで海馬社長とプロデュエリストのデュエルで青眼の白龍が出たときの歓声と言つたら……。

ありがとうございました、アナウンサー。的確な言葉で助かりました。そのお陰

で俺は強化もほどほどにしようと決めて、学校でさっそくデュエルをした。そうしたら平均2400の戦士達による蹂躪劇だった。

あれよあれよと黙つ間に俺の成績は鰻登りだ。たった三週間で学年次席まで登り詰めた。うん、元の世界だと禁止カードもこの世界なら平然と使えるから回る回る。ちゃんとした場所で強欲な壺を使つたりとかな。

それに良いことがあった。ブラッド・ヴォルスとミノタウルスの2枚と原作アニメ効果の天よりの宝札を交換してもらった。もちろん、宝札は2枚だ。学年主席の人と仲良くなつて獣戦士系でいいカードがないかと聞いてきたので、その2枚を見せたら欲しいと即決。

交換したら宝札2枚だつたのは驚いた。俺が交換したカードはどちらも星4のノーマルモンスター。しかし、この世界なら一線級の攻撃力持ちだ。しかも、しかも、その主席曰わくこの2枚は海馬社長が使つたことがあるカードとして一枚20万円で取引されてるらしい。

宝札は一枚15万なので彼、松山君は申し訳なさそうにしていた。まあ、大切に使つてくれるならと黙つて笑うといつちが戸惑つくりい感激していた。

うん、人を感激させるなんて元の世界じゃ不可能だつたな。実態は三十路の誕生日に仕事クビになつたマダオだしなあ、俺。

まあ、この世界だとデュエルが強ければマダオなんて呼ばれないだろつし、目的のために勝つて勝つて勝ちまくつてやる。日々、デュエルをしていてわかつたことだが、デュエルのレベルが全体的に低い。だから俺くらいの戦術でも無双が出来る。

松山君みたいな例外もいるにはいるが、同学年の生徒は大したこと  
はなかつた。ただ、松山君にはいいところでいつも負けている。コ  
マンドナイトでロックして攻撃したらサイクロンで一族の結束を破  
壊された上に収縮されてロックを外されたり、野生解放使って真つ  
向から叩き潰されたり……わざとモンスターを揃えさせられて激流  
葬で一気に流され。

もつ、ほんと罠と魔法の扱いが巧いつたらない。さすがは学年主席  
で満橋中学最強だ。偽装用デッキじゃなくて俺お気に入りのデッキ  
で早く戦いたい。早くアカデミアの受験日来ないかな。と、そうだ  
そうだ。忘れるところだった。

俺が親孝行をしようとした翌日、部屋を漁つていると鍵を見つけて  
部屋に何故かあつた鍵付きの戸棚を開けた。そうしたら中には見  
慣れないデッキが複数あつて中を確認してみたら、かなりのレアカラ  
ードが大量に……ゲームの中でしか組んだことのないバーンデッキ  
やE-HEROのデッキなどがあつた。

そこでようやくこの世界に持ち込んだ荷物を確認をした。そこでシ  
ヨックなことが……PSPに差したままだつたはずのゲームソフト  
が消えていた。差してあつたのは遊戯王のゲーム……最新作のTF  
6だ。

高かつたのに……しかし、そこで見つけたデッキを思い出して、全  
部確認すると時機神のデッキを見つけてとある可能性に行き当たつ  
た。ゲームの中で組んだデッキが実体化したからソフトが消えた、  
と。そんなバカなど一笑できる考えだが、遊戯王の世界に来たこと  
を思えば安易に否定するのは無理だ。

まあ、この「ナック」の数々は有効利用するつもりだ。もつとも非公式デュエル限定だが。

そんなこんなでアカデミアの入試の日が近付いてきたある日、俺は松山君からデュエルディスクを借りることが出来た。今は自分の部屋で装着している。なんで自家で付けているかは簡単。

ソリッドビジョンの投影比率を小さくして、持つているカードがちゃんと反応するか確認するためだ。ただ、邪神が反応すればみんな反応するだらうからわざと特に気に入りのアバターとドレッドをディスクにセットした。

投影オンリーだから生贊はいらない。そうしたら小さくアバターとドレッドが無事投射された。ああ、これで安心して試験に臨める。今まで中学での授業だと生徒全員が出来るように机をくっつけて紙のシートでやっていたから今の今まで確認できなかつたんだよな。

それにしても良い仕事をしているな、海馬社長は。アバターがちゃんとドレッドの姿に変わつてるよ。くつ、公式デュエルで使えないのが悔やまれる。まあ、出せるかは微妙と言わざるを得ないが。

そうして借りたデュエルディスクを松山君に返すと、とうとう入試の日になつた。まずは筆記で、翌日に実技という予定になつていて。筆記に関しては分からぬ問題もあつたが、手応えはあつた。

そして、翌日。俺はワクワクして眠れず、試験会場である海馬ランにて受験生で一番に入場した。そこで渡されたのは31番のプレート……つまり筆記試験の成績は31番目というわけだ。まあまあだ

な。実技でミスをしなければ十分に良いスタートを切れる。

この日のために試験用の「ツッキ」を組んだんだ。実技はトップで通過してやる……圧勝すれば確実に入学できるだろ。試験用はそれが可能だ……多分。

ふあ、早く来すぎて暇だ。それにあんまり寝てないから眠くて仕方がない。携帯のアラームを試験が始まる20分前にセットして……うん、これなら2時間は眠れる。よし、おやすみなさい。

「　　い　　おい、たかみ　　おいつー

「んあつ？」

寝ていた俺は起された。誰であろう友人の金ちゃんに……ちなみに金多 剛が本名だ。略して金ちゃんで、小学校からこのあだ名は変わらない。なんか焦つてるけど……て、あれ？ 俺はがばっと起き上がり、携帯の画面を見る。そつしたらもうすでに試験が始まってる時間を大幅に過ぎていた。

「あ、あの金ちゃん。俺って不合格?」

「あともう少しどな。ほれ、さつさと行つてこ」

多分、試験用のデュエルテイスクを受け取り、俺は慌てて鞄からデッキを取り出してセットした。そして、金ちゃんに礼を言つて試験官が待つ壇上に上がる。

「デッキ調整で徹夜したのかい?」

「えつと、はい。絶対に合格したかったので……」

「はつはつはつは、そのやる気は花丸をあげよう。だが、体調管理もデュエリストの前に人として当たり前だからな。今後は気をつけよつて」

「はい」

気安く朗らかな男性試験官でよかつたと思つ。うん、寝過ごして不合格にならないみたいでよかつた。

「それじゃ時間も押してるし、さつさくやるか

「お願いします」

お互いにデュエルディスクを構える。そして……。

『デュエルっ！』

互いに開始の合図を高らかに宣言する。

「先行は君からだよ」

「はい、ドロー！」

あれ？ スネーク・レインが2枚にエーリアン・リベンジャー、エーリアン・マザーと宇宙獣ガンギル……あ、エーリアン・グレイがある。って、ちょっと待て。

デッキ間違えたあつ！？ これエーリアン主軸のロカラハイ  
a<sup>ア</sup>デッキじゃないか！ 試験用に組んだのは剣闘獣のデッキなのに……あ、慌てて取り違えたよ。しかも、初手がかなり悪いし……グレイしか出せないじゃないか。

うう、合格最低ラインに達せれるよう足搔いてやる。まずは……。

「手札から通常魔法、スネーク・レインを手札のエーリアン・マザーを捨てて発動します。このカードはデッキから爬虫類族モンスターを4枚墓地に落とします。落とすのはエーリアン・リベンジャーとエーリアン・ヒュープノ2枚とエーリアン・テレパス」

「ん？ そんなデメリットカードを使って何がしたいんだい？」

「ただの墓地肥やしですよ。さらにもう一枚、スネーク・レインを手札の宇宙獣ガンギルを捨てて発動。エーリアン・テレパスにエーリアン・ハンター2枚、エーリアン・キッズを墓地に落とします。最後にモンスターをセットしてターンを終了します」

「これで10枚爬虫類が墓地に落ちた。8枚も圧縮出来たから……あと27枚か。せめて試験官が大物を出す前にリベンジャーを出す準備整えないと。グレイイじゃなくてウォリアーの方がよかつた。」

「では、私のターンだ。ドロー。私は手札からモンスター効果を発動。手札からサンダー・ドラゴンを捨てる事でデッキから別のサンダー・ドラゴンを2枚まで手札に加える事が出来る」

「このパターンは……融合来るか？ ライフが4000で双頭の雷龍サンダー・ドラゴンはキツいってもんじゃない。今日は厄日なのか？」

「サンダー・ドラゴン2枚手札に加え……私はRAI-MEIを攻撃表示で召喚」

黄色い稻妻模様が入った紫色の全身スーツを着た美少女が実体化する。確かにこのモンスターって戦闘破壊で発動するサーチモンスター

か。攻撃力も1400と高めだ。

「バトル！ RAI-MEIでモンスターに攻撃！ ライトニング・キック！」

RAI-MEIが稻妻を纏つた飛び蹴りでリバースして姿を現したグレイを豪快に蹴り飛ばした。

「リバース効果発動！ リバースした時、相手フィールド上の表側表示で存在するモンスターにAカウンターを一つ乗せる！」

グレイが飛ばされながら緑色の液体をRAI-MEIに吐き付けると碎け散つた……「うわ、グロッ！？」なんか周りから女の子の悲鳴が聞こえたが、無視だ。

「さらにリバースしたエーリアン・グレイが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから1枚ドローする！」

引いたのは……またグレイかよ！

「ふむ。私は2枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

エーリアン・ブレインか……まだマシだな。

「俺はモンスターをセットし、一枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー！ 私はRAI-MEIを生贊に充電池メンを攻撃表示で召喚！ 充電池メンの効果発動！ このカードが召喚に成功した時、手札またはデッキから充電池メン以外の電池メンと名の付いたモンスター1体を特殊召喚することができる。私はデッキから電池メン・単三型を攻撃表示で特殊召喚！」

せっかく乗ったAカウンターが……しかも、電池メン・デッキかよ。裏側セットでよかつたかもしかん。電池メン・デッキの常套手段は単三型を特殊召喚して地獄の暴走召喚で一気に揃える戦法だ。電池メン・単三型の効果は……。

「電池メン・単三型の効果、このカードと同じ名前のモンスターがすべて攻撃表示だった場合、1体につき10000ポイントアップする。守備表示だった場合は守備力が10000ポイントアップだ。さらに充電池メンの効果、このカードの攻撃力・守備力は自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンスターの数×300ポイントアップする。充電池メンを合わせて2体……よつて600ポイントアップ」

3体揃えれば攻撃力が30000……ライフが80000有つても耐え

きるのは難しい。ただ、地獄の暴走召喚を使うには相手側……つまり俺のフィールドに表側表示のモンスターがいなければならない。グレイはセットで出したから発動条件を満たさなかつたわけだ。そもそも手札にあるかは怪しいけど、あると仮定して行動した方がいい。

「バトル。私は電池メン・単三型で伏せカードを攻撃！ スパーク・エンド！」

「リバース！ 僕は充電池メンにAカウンターを乗せる！ さらにエーリアン・グレイが破壊された時、罠カードエーリアン・ブレイブを発動。このカードは自分フィールド上に存在する爬虫類族モンスターが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地に送られた時に発動することができる。その時に攻撃を行ったモンスターのコントロールを得て、そのモンスターを爬虫類族として扱う」

「なにっ！？」

「そして、エーリアン・グレイの効果でドローー！」

これで単三型の分は下がった。それでも充電地メンの攻撃力は2100。単三型の分を引いて1100のダメージか。

「ならば充電地メンで電池メン・単三型を攻撃！ チャージ・ショット！」

「くつ……ー？」

「おお、爆風が起きた。リアルだな……って、んなわけあるかい。これ立体映像だよね？ なんで爆風が起きるんだよ。でも、周りは気にしてないし問題はないのか？ ないんだろうな。そよ風程度だから今後は無視だ。」

「これで俺のライフは残り2900になつた。双頭の雷龍の攻撃1発は耐えられるが、充電地メンの存在で双頭の雷龍が融合召喚されたら詰む。試験官の手札は4枚、その内2枚がサンダー・ドラゴンとしても残り2枚に融合は無いんだろう。」

「グレイの効果で引いたのは大嵐だつたし……本格的にヤバいで。まあ、これを使って伏せてあるカードを破壊しないとな。」

「私はそのままターンarendだ」

「俺のターン、ドロー！」

「このままだと充電地メンで押し切られてしまつぞ！」

「確かにこのままだつたら負けるな。手札のモンスターは星6のリベンジャー1枚。それと大嵐に……強欲な壺！」

「俺は大嵐を発動！」

「なつ、私のミラーフォースと暴走召喚が！？」

あ、危な過ぎだろ。カウンター・ラップ警戒して発動してよかつた。

「さらに手札から強欲な壺を発動して2枚ドロー！」

まだギリギリか？俺が引いたのはスネーク・レインと細胞爆破ウイルスだ。

「俺はカード一枚を伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー！私はライオウを攻撃表示で召喚！これが通ればお終いだよ。バトル、私は充電池メン、ライオウでダイレクトアタック！」

よし！

「充電池メンの攻撃宣言にリバースカード発動！細胞爆破ウイルス！このカードはAカウンターが乗ったモンスターの攻撃宣言時に発動することができる！相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターをすべて破壊する！」

「なんだつてつ！？」

これでなんとか凌いだ。でも、まだまだ危機は脱してない。手札には召喚できるモンスターはいないからな……何が何でも引いてダメージ『えないと。

「くつ、ならば私は500ポイントライフを払つて手札から充電器を発動する。墓地から電池メンと名のついたモンスター1体を特殊召喚する。私は充電池メンを特殊召喚してターンエンド」

なつ、クソ。充電池メンの攻撃力を超える下級モンスターなんていないぞ！？

「……俺のターン、ドロー！ くつ、俺はモンスターをセットしてターンエンド」

引いたのはエーリアン・ウォリアーだった。攻撃力は1800と充電池メンの元々の攻撃力と同じだが、300ポイントアップしてから勝てない。

「私のターン、ドロー！ ふつ、ようやく来たか」

嬉しそうに引いたカードを見る試験官に俺は嫌な汗を搔く。ここで喜ぶカードなんて1枚しかない。

「私は手札から融合口を発動！」

そう融合だ。恐らくあの「テッキ」のエースモンスターの登場だ。

「手札のサンダー・ドラゴン2体を融合！ 招来せよ、双頭の雷龍サンダー・ドラゴン！」

攻撃力2800の雷族の融合モンスター。サンダー・ドラゴン1枚と融合が手札にあればすぐにでも出せるお手軽な上に強力……蘇生制限もないから蘇生も容易だ。

「バトル。充電池メンで伏せカードに攻撃！」

「エーリアン・ウォリアーの効果発動！ このカードを戦闘によつて破壊したモンスターにAカウンターを2つ乗せる！」

「双頭の雷龍サンダー・ドラゴンでダイレクトアタック！ サンダー・ホーン！」

ぐつ、軽い衝撃が。残りライフはたつたの100……双頭を倒せるモンスターは1匹だけ。3詰みしてるはずなんだけどなあ。

「私のターンはエンドだ。次のターンで私の勝ちだ」

「うう、ドロー」

引いたのは……。

「よつしやあつ！」

「お、いいカードでも引けたのかな？ だが、双頭の雷龍を超える  
のは難しいぞ」

引いたのは地縛神とは別の切り札。しかも、今の状況で出せば神に  
すら勝てる。つと、念には念を……。

「俺はエーリアン・リベンジャーを捨ててスネーク・レインを発動  
！ デッキから爬虫類族モンスターを4枚適当に墓地に送る！」

「む？」

「このターンで終わりだ！ 俺は手札から邪龍アンタを特殊召喚  
！ この時、自分のフィールド上と墓地に存在するすべての爬虫類  
族モンスターを除外する！」

除外された爬虫類族モンスターの数は…… 18枚！

「邪龍アンタの攻撃力と守備力は特殊召喚時に除外した爬虫類族  
モンスターの数×600ポイントになる。除外した数は18体……」

よつて邪龍アナンタの攻撃力は10800！

「10800だつて！？」

「バトルだ！俺は邪龍アナンタで双頭の雷龍を攻撃！ インフィニット・エクスキューション！」

「ぐ、くうううう……」

邪龍アナンタは6つ首の龍だ。そのすべてから黒い奔流が吐き出され双頭の雷龍を飲み込む。占めて8000のバトルダメージだ。このデッキの切り札中の切り札。

このデッキは本来、エーリアンで殴りながら地縛神Carayhua<sup>カライア</sup>を召喚して攻める。Carayhuaが倒され墓地が肥えてきたら邪龍アナンタを召喚して勝ちを奪いにいく。そんなコンセプトだからか、今回みたいにとことん手が悪いと簡単に追い詰められてしまう。

まあ、今回みたいな悪さは滅多にないんだけどな。いや、まったく……焦るわ。

「ふう、試験終了だよ。まさかあの状況で逆転されるなんてビックリしたよ。結果は後日通達するからね」

「はい、ありがとうございました！」

俺は礼をして壇上を降りる。試験が終わった者は自主帰宅していいということなので俺はさつさと帰る。ゆっくりと寝るのだ。

金ちゃんに起してくられたことに改めて礼をしてから俺は試験会場を出る。その時に……。

「ヤバいヤバい、遅刻だあー！」

茶色い髪のおかっぱ頭に近い髪型の少年が焦りながら俺が来た道を走り去つていった。うん？ あつちは入試で貸切状態なんだけど、まさか入試に遅刻したのか？

始まる前に寝て、寝過ごした俺が言えた義理じやないけど大丈夫だろ？ あの子は。まあ、俺が気にして仕方がない。よし、今日は寝るだー！

## TURN-01【vs試験官】（後書き）

ちなみに主人公の名前 高峰 勝利 は たかみね まさとし と  
読みます。

## TURN-02【アカデミアで出来た友達 前編】（前書き）

前回の第2話を前編後編に分けました。前編は全然変わってませんが、後編は加筆修正した『ユエルシーン』です。

今回使う『テック』がオリ主『高峰 勝利』の一一番信頼し頼りにしている『テック』です。

合格通知が来た。それからは大変だったな。家族は大いに驚いて豪勢な夕食だったり、妹2人に見直したと言われたり。

ただ、残念なのは金ちゃんが落ちてしまったことだ。知識が足りず、実技で有効な手を打てずに負けてしまったらしい。俺が渡したカードも引けなかつたと言つていた。

だけど一浪して来年再受験するらしい。今まで学年最下位だった俺が合格したことで、1年勉強し直せば自分も合格できるだろうと考えたらしい。どうしてそんな考えになつたか素直に聞けば、俺が隠れて勉強を頑張つていただろつと言われた。

いや、まあ、学年最下位から次席に登りつめた時に一部生徒とある教師に八百長の嫌疑かけられるほど急だつたんだけどな。それを指摘すればカードが足りなかつたから今まで伸びず、急に伸びたのはカードが集まつて努力が実つたから。

そもそも俺の性格上、八百長なんてしないときっぱり断言した金ちゃんに俺は嬉しくなつた。確かにあの「デッキ、かなりカード不足だつたからな。直接排除系の罠なんて入つてないくせに60枚……ほんとどが一時凌ぎしか出来ず、回りくどい排除系ばっか。

最高攻撃力が1500でポールポジションつて意味なしだと思つたらサイクロンが2積みしてあつたから、ポールポジションで1500以上のモンスターを破壊するつもりだつたんだろうね。

あっちでも俺を気遣つてくれた先生はこっちでも同じだった。俺が次席になつた時は大層喜び、アカデミアの入試合格を聞いた時は俺の肩を叩いて喜びを表していた。ちなみに松山君も合格している。

俺が渡したブラッド・ヴォルスが決め手になつたらしい。それを引いて決め手にまで導いたのは松山君の実力なのに、感謝されるのはかなり違和感があつた。でも、まあ、感謝されるのは悪い気分じゃない。

それで色々と準備をしてアカデミアに向かう日になつた。俺は船に揺れ揺られながら今はおむすび片手に海を眺めている。ヘリコプターか船かの選択式だつたが、のんびり行きたかったので船を選択した。なのでヘリ組よりもちょっと早めの出発だ。

船での食事はバイキング形式で、お持ち帰り用におにぎりまである。今食べてるのもそれだ。うん、和むわあ。なんて至福、なんて贅沢。塩加減も抜群に美味しいおにぎりを食べながら大海原を見渡せるなんて……なんて幸せ者なんだ、俺は。この景色とこのおにぎりなら、何個でも食えるぞ。

あ、いかんいかん。痩せるつて決めたばっかりなのに……明日から頑張ろう、うん。そうして優雅な船旅を3日も満喫して俺はデュエルアカデミアに到着した。これぞ大自然と言えるよつた島だ。

食べ物の輸送代とかバカにならないだろうなあ。それにしても電気は通ってるのかな？この世界にもPSPがちゃんとあつたからモンハンやりたいんだけど、充電できないとあつと言つ間に遊べなくなるから、通つてなきゃ困る。

つと、ヘリ組も到着したみたいだな。大型のヘリが船が停まっている港から見えるヘリポートに向かっていった。遅刻したらしやれにならないし、校舎に向かうかな。俺は旅行用のキャリーバッグを引きながら校舎に向かつた。

校長先生の長い話が終わり、俺は自分の寮にやつてきた。一人一部屋あるらしく、とつても大きく立派な建物だった。ちなみに俺はラーライエローだ。昔、テレビの特集で見た軽井沢の別荘みたいで、今夜の歓迎会がとても楽しみになる。

それと学校から「テュエルティスクをもつたからこれからはいつでも立体映像でデュエルができる。これ、買おうとすると高かつたんだよね。バトルシティの参加者はタダで手に入つたみたいだけど。安くて2万、高くて6万……さすがに買つてくれなんて言えないよ。

つと、よつやく着いた。俺は自室に着くと部屋に入り、事前に送つておいた荷物を開ける。その中には小さな金庫が入っていた。これは俺が持ち込んだ財布の中にあつたお金を使い買つた……全部使い切つても小さな物しか買えなかつたが、これはダイヤルに加えて鍵も付いてる一重ロック式。鍵には紐を付けて落とさないように肌身離さず持ち歩く予定だ。

金庫の中にしまうカードは邪神を含んだこの世界ではレア中のレアな物だ。三幻魔も金庫の中……パソコンで調べた限り、D・HERO、宝玉獣、アルカナ、サイバー系などなど、この世界だと特定人物しか持つていないと広く知られているカードをしまつてある。こんなに見られたらどうなるか分からなか……なら、持つてくれるなど言われそうだが、家に置いてると母さんか妹に発見される可能性があるから仕方がない。

まあ、E・HEROは主人公以外にもプロに使い手がいるし、比較的簡単に入手できるから金庫にしまう必要はない。ただ、学園には主人公一人だけだったはずだから見分けは付くだろう。ただ、テレビだと融合体は3体しか見たことがないんだよな。フレーム、サンダー、テンペスターの3体……下級も基本の8体のみ。

ヒートやエアーマンは見たことないんだよね。属性HEROも。この世界に無いんだろうか？　さすがに調べられなかつたから確認のしようもないし……ただ、この世界のカードは色々とカオスだつた。

野球の遊戯王カードがあつたり、テニスの遊戯王カードもある。将棋の遊戯王カードまであつたのは驚いた。やっぱり希望とかアンケート取つたりして新しく作つたりしてるんだろうな。そういうえば魚族限定のコントロール奪取カードで“一本釣り”なんてのもあつた。

使うとしても相手が限られてる、と思ったが自分の墓地から蘇生もできる効果があり速攻魔法だから魚族版の結界通路みたいなものだつた。それにプラスして相手フィールドに存在する魚族モンスター1体のコントロールを奪う効果に、墓地蘇生は相手の墓地も効果範囲とけつこう強力だ。

でも、俺は魚族を使わないから強力でも宝の持ち腐れになる。それに高いし……一枚4万と書かれてたのには心底驚いた。まあ、魚族デッキには必須の蘇生カードだからかもしれない。そんなことをつらつらと考えている間に俺は金庫の中に邪神デッキと各種カードを丁寧にしまい、金庫はクローゼットの中に置いた。ちなみに金庫の扉は壁に向けて、その上に布を敷いて隠してから畳んだ服を乗せるカモフラージュも万全。

結構重いから盗む前提で、場所を知つてないとまず触らないだろう。暗証番号も入試の時に乗つた電車についていたプレートの番号だし、誰もわかるまい。適当に回して当たつても鍵が無ければそもそも開かないし。服もしまつたし、一番のお気に入りデッキも母さんに買って貰つたケース付きジャケットに入れたらし……そのジャケットの上から大きめに注文したラーアイエローの制服を羽織つてつと。

今日1日はもう歓迎会くらいだから時間になるまで暇を潰してこよ。となれば学校探検だな。学校からもらつた生徒手帳代わりの端末PDAがあれば迷わないだろう。通信機能ありメール機能あり地図機能ありとかなり高性能な代物だ。準備はOK、よし。

さて、探検だ！

そつ意気込んで出たはいいものの、数十分後……。

「うー、どう？」

思い切り迷っていた。PDAは操作が分からず適当に弄つて……今は画面にエラーと出てしまつていて。直し方なんてわかるはずもなく、とにかく人に聞くべく歩き回つていた。そしたらどんどん意味が分からなくなつて、人にも会えずに呆然としてるわけだ。

「あははははは！」

「ん？ 向こうから声がする。やつと帰れるかも！」

近くの扉から聞こえる笑い声に俺は安堵と同時にテンションが上がる。いい加減足が痛くなつてきただけどイエロー寮に帰るとわかつて俺は声がする方に走り出し、赤と青の制服が見えたところで声を張り上げた。

「ピーク「すみません!」

なんか声が聞こえたけど、多分気のせいだ。

「な、なんだお前は。大きな声を出しやがつて」

「あ、この人は……」

「翔、知ってるのか?」

なんかオシリスレッドの方は2人で話し始めちゃつたからオベリスクブルーの2人に聞くか。

「ちよつと道に迷つちよつて。」Jからイイローライセンスに帰るこせびつ  
すりやいいかな？」

「はあ？ そんなのPDA見りやいいだりうが

「いや、Hリーになつて何がなにやひ

俺がPDAの画面を見せて教えてくれるよつに軽く頭を下げながら  
頼んだのだけビ。

「オレ達オベリスクブルーが半端者の寮など知るわけがないだろつ。  
他を当たれ」

「む、知らないのか

知らないなら仕方がない。けど、態度がな。こつちは頭を下げて頼  
んだのに雑に対応されてムカツとする。

「なあなあ、俺達が案内してもいいぞー、その代わり俺とトユエル  
してくれよ」

「へ？」

俺がオベリスクブルーの2人にムカムカとしているヒオシリスレッドのおかっぱ頭の方に声をかけられた。

「ほんと?」

「マジマジ。代わりに俺とデュエルしてくれればな

「それくらいだつたらお安い用だ。地図が読める人に会えてよかつた」

「おい、それはどういう意味だ!」

「え、イエロー寮知らないんでしょ?」

俺の言葉にメガネをかけた方のブルーが食つてかかつてきた。結構ムカついたから意趣返しもかねて言つたけど、こうも食いつきがいいのか。PDAには地図が出るつて説明書には書いてあつたから知らないつてことは読めないつて解釈しただけだけどね。

確か入学案内にはブルーは中学での成績優秀者用のクラスだつて書いてあつたから、癪に障つたんだろうね。金ちゃんからはブルーはプライドが妙に高いのが多いから気をつけろと言わされてたけど、こ

の分だと本当みたいだな。

「貴様、オレの言葉を遮るだけじゃなくなんだその態度は…」

つと色々考えていると客席部分に立っている……なんか漫画の主人公みたいな髪型の人物が俺を見下ろしていた。もしかしてGX主人公か？にしてはなんか、物語最初に出てくるかませなエリートっぽいんだけど。

「えっと、どなた？」

「な、なんだと！？」

え、どこに驚愕する部分があつたんだ？ 大げさに驚く少年に俺は首を傾げる。

「外部入学者はことん無知だな。この方は中等部からの生え抜きのエリート。中等部クラスのナンバー1」

「未来のデュエルキングの呼び声高い、万丈目準様だ」

「ふうん」

いや、アカデミアの中等部で有名なのはわかつたけど。他校の順位なんて知るわけないんじゃないか？ それに未来のデュエルキングつて、まあ、夢は大きくな。

「将来の夢は大きいに越したことないからね」

うんうん、頷いているとなんかブルー生徒2人と万丈目という少年の纏つ空気がやや怖い。あれ、何か怒らすこと言つたかな？

「大した自信だな。さすがは入試でまぐれにも8000のオーバーキルをしただけはある」

「あ、えっと、そりゃどうも？」

「んん？ なんか急に褒められた……なんで？ 唐突に褒められ困惑していると……。

「「」なんといふで何をして居る。翔」

「……翔壹兄さん」

丸メガネをかけたオシリスレッドの少年が俯きながら、声を掛けた少年に返事をした。声を掛けってきた少年はオシリスレッドの翔と呼ばれた少年と瓜二つ……違うのはメガネがない事と田つきがキツいどころか。「」今まで似てる上に兄と呼んだって事は双子か。つと着てる制服は青。つまりオベリスクブルーか。

「「」はお前みたいな雑魚が来るべき場所じゃないさつさとボロ小屋に帰るんだな」

「うん、第一印象は最悪。」んなのとは仲良くなれやつもないし、こんなのが兄だなんて翔君には同情するよ。

「誰だ、お前。翔の兄貴みたいだけ言つて良いこと悪いことがあるぞ。翔に謝れ」

「……兄貴」

「貴様は遊城十代か。このオレ我が雑魚に頭を下げるわけないだろ？が。同じ学校に通つているだけでも虫唾ムシザバが走るんだからな」

「うわあ、駄目だ。」こいつ、性格が悪すぎる。万丈目と他2名も顔をしかめてるのを見ると、オベリスクブルーでも浮いてるんだろうなあ。まあ、そんなことよりも。

「あなた達なにしてるの」

わざわざこの場を退散しようと余話に割り込もうとしたが無理だった。黄色に近い茶色の長い髪の女の子が腕を組みながら笑ってきた。翔の兄のブルーはその女の子が出てくるとニヤリと笑う。

「わあ、綺麗な人……」

「明日番じゃないか。我的モノになる気になつたのか？」

「お断りよ。冗談でも言つて良いことと悪いことがあるわよ

なんだらうか。顔を赤くしている翔と、目が完全に胸にいつている翔の兄……やつぱり兄弟だから反応が似たり寄つたりなのか。ついで迷つて腹が減つてるから帰りたいんだけど……そろそろだらうし。

「冗談ではない、本気だ」

「嫌よ。私にだつて選ぶ権利があるわ」

「丸藤つ！ 天上院君が嫌がつてているだらう。やめたまく」

「ふん、万丈目が満を持して止めに入つた。うん、俺から見ても女の子は嫌がつてたしな。

「ふん、なんだとあつ！？」

「我に負け続けているだらうが。それがオベリスクブルーのトップ？ 笑わせてくれる。明日香にふさわしいのはこの我だ」

「ううのをナルシストつて言つんだらうか。本物なんて初めて見

たよ。まあ、デュエルが強ければたいていは見逃される世界みたいだし、こうじうのが居ても不思議じゃないのか？あの女の子には悪いけど、もう限界。

「なあ、あんなのはどうでもいいから、そろそろ頼みたいんだけど……」

「今、なんと言つた黄色い雑魚が」

「腹減つてもう限界なんだが、十代で良かつたか？」

「お、おう」

なんかナルシーが話しかけてきたけど無視。あんなのと話してたら時間の無駄になる。話しかけた十代が戸惑いながらも腹を鳴らす俺を見て苦笑いを浮かべた。

「そこがあなたの言つ通りね。それにそろそろ歓迎会が始まる時間よ。だから私は行くわ

「明日香、まだ話は終わつてないぞ！」

「私にはないわ

そう言つて女の子はわざと行つてしまつた……しかも、冷たくあしらわれてやんの。さて、俺も十代に案内してもらつて帰るか。

「貴様つ！？ 余計なことを……雑魚の分際で！」

「十代、頼むな」

「おつよー 約束忘れるなよ」

「まあ、デュエルはまた今度な。もうすぐ歓迎会があるから時間ないし……なによりも腹が減つたからな」

何か言つてゐるが、答えると間に合わなくなるから無視しよう。十代ももう興味を失つたのか帰る気満々だ。翔はあわあわしているけど。

「オレ達も行くぞ」

「あ、はい。万丈目わん」

万丈目達もさつさと立ち去つたし、俺達も行こうか。十代が走り出

してしまったので俺と翔は慌てて追つていく……ちょ、速い！ 俺、太ってるから足遅いんだよお！？

あ、こら。翔まで置いてくな！ 案内してくれるんだろ！

無事に十代に案内されて帰ったイエロー寮での歓迎会で俺は大いに楽しんだ。十代と翔という新たな友人も見つかってたし、今度レッド寮でデュエルする約束もしたし、楽しくなるぞ。

そつワクワクしながらメインデッキを調整していると、イエロー寮を管理する先生に直してもらつたPDAが鳴つた。

「誰だ？」

映像付きメールみたいだつたため再生してみると、映つていたのはあのナルシーだつた。翔の兄、丸藤翔壱だつた。

『今晚、我達が出会つた場所にて待つ。貴様の身の程といつものを見  
思い知らせてやる。臆せば来なくとも代わりに別の奴のデッキが無  
くなるだけだがな』

なんだろうか。凄まじくムカつく顔で笑つてゐるし、しかも、なんか物語で出てくる類の人質を取る悪役なこと言つとるし。うう、校則で夜出歩くなつて書かれてるから行きたくないんだが……俺とは別の人人が被害に遭つてゐるかもしれない。それは寝覚めが悪すぎる。

「行く、しかないか」

デッキは……メインだな。向こうでもよく使って、金ちゃんのエクゾディアデッキに唯一対抗できたデッキ。さらにF・G・Dが3体、究極竜騎士が2体揃つた場を全滅させた唯一のデッキ……あの時はもう駄目かと思つたな。

このデッキなら基本的にどんなデッキにも対応は可能だろ?。弱点もはつきりしてゐるけど、それさえ当たらなければ大丈夫だ。さて、ちやつちやか終わらせて帰つて寝よ。

この世界のデュエルリストでのデッキの弱点を使う人なんて滅多に

いないだろ？しな。といふかいるんだろ？か。かなり特殊だしつと、こつそり行かないとな。抜き足差し足千鳥足つと……あれ、なんか違うよ？まあ、いいか。

先生に教わった通りにPDAを操作して地図を表示してナルシ一翔壱と遭った場所、オベリスク専用のデュエル場だつたな。やや足取りは遅いもののなんとかデュエル場に着くと……。

「あつはつはつはつは！遊城十代。雑魚その2を倒した程度で我に勝てるとは思い上がりも甚だしい。貴様のデッキはアンティの取り決め通りに貰うぞ」

十代が膝を屈して、十代のらしきデッキを持つて高笑いしている翔壱の姿があった。

「あ、兄貴い」

「ん、遅かつたじゃないか。高峰勝利」

「勝利じゃない、勝利だ。これはビリビリ……」

「伝えておいたはずだ。貴様が来なければ他の奴が代わりになると……それが遊城十代だつたというわけだ」

「……」

俺が来る短時間で、か。近くには万丈目がいるが、ヤツの言葉から  
万丈目は十代に負けたらしい。仮にもブルートップのエリートと呼  
ばれる万丈目に勝った十代が負けるとは……。

「さて、ここに来たということは、我に『テッキを差し出す覚悟ができる  
たといつことだな」

「そんな覚悟なんてしてないよ。で、呼んだってことは」

「『テュエルだ。貴様の『テッキを賭けたアンティ』『テュエルだ』」

「こいつことは十代はアンティを受けたってことか。ここで俺がやること  
ことは決まったかな、逃げられそうになんこし。それに、アカデミア  
で初めての友達だし、十代とは今度『テュエルする約束してるんだ。  
それなのに『テッキが盗られかけ出来ないしな。

「なり、お前は十代の『テッキを賭ける』、取り返してやる」

「ハツ、我が負けるはずもないがよからぬ。貴様には先ほど得た遊  
城十代の『テッキを賭けてやる』」

態度がデカすぎる。アソツ……丸藤翔壱の『テッキ』の中身は知らないけど、メインを持ってきてよかつた。

『デュエルっ！』

互いに『デュエルディスク』を構えて叫ぶ。絶対に十代の『テッキ』を取り返してやる！

『デュエルっ！』

今日知り合つたばかりの勝利君が翔壱兄さんと向かい合つてデュエルを始めた。翔壱兄さんは見たことも聞いたこともないモンスターと召喚方法で兄貴を倒しちやつた。僕だけが知らないなら勉強不足だと思えるつスけど、同じく今日知り合つた明日香さんも知らないみたいだつた。

「大丈夫かしらね、あの子」

「ああ。あの白いドラゴンを出されたら危ないだろ？」

「兄貴とのデュエルで出てきたモンスターつスね」

兄貴と明日香さんが勝利君を心配そうに見ている。僕は正直言つて翔壱兄さんに勝てるとは思えないよ。兄貴が手も足も出なかつたら。

「まずは我的ターン、ドロー！」

先行は翔壱兄さんからみたいだ。無茶でもお願いつス、兄貴の「チッキを取り返して欲しつス。頑張れ、勝利君！」

「私は……手札からレベル・ステイーラーを捨てクイック・シンクロンを特殊召喚する！」

「なんだつてつ！？」

丸藤翔壱の行動にあの子が驚いている。手札を捨てて特殊召喚するモンスターくらいで驚くなんて、ラーアイエローとは思えないわね。いえ、何か引っかかる。何に引っかかっているのか分からずモヤモヤとした気持ちになるけど、デュエルはそんな私を置いてどんどん進んでいく。

「そして墓地のレベル・ステイーラーの効果。フィールドのクイック・シンクロンのレベルを1つ下げる墓地から特殊召喚！ レベル

「1のレベル・ステイラーにレベル4のクイック・シンクロンでチューニング！」

来たわね。十代とのデュエルで出てきたシンクロモンスター。1ターン目から来るなんて……十代とのデュエルだとそれなりのターンが経過してからだったのに。あの子も運が無いわね。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

飛行機のエンジンのような物を背負つた青い戦士がフィールドに現れる。どう見ても機械族に見えるんだけど、それでも戦士族なのよね。

「さらりに手札からジャンク・シンクロンを召喚し、モンスター効果発動！ 墓地に存在するレベル2以下のモンスターを効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚！」

「ああつ！？ 兄貴が負けた展開と同じだ」

今度はジャンク・ウォリアーに似た小さな茶色のモンスターが召喚される。翔君が叫んだ通り十代の敗因となつたモンスターが召喚された流れとほとんど同じだつた。

「出るか、スターダスト・ドラゴン！－？」

「……そうね」

十代は拳を握り締めながら食い入るようにフィールドを見つめる。そうよね、あなたの大事なデッキを奪われたのだから。でも、私たちの予想は外れた。

「レベル5のジャンク・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！ 王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！ シンクロ召喚！ 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

丸藤翔壱が召喚したのはスターダスト・ドラゴンではなく、悪魔のような赤いドラゴン。攻撃力3000の上級モンスターだつた。

「スター・ダスト・ドラゴンじゃなーつー？」

「別のシンクロモンスターつスかつー？」

「まだいたのね。しかも、攻撃力3000のモンスターがいきなり1ターン目から召喚されるなんて……」

それにきっとあの赤いドラゴン……レッド・モンスター・ドラゴンにも特殊な効果があるはず。あの子はどうやって切り抜けるのかしら？私が気になつてあの子を見ればシンクロ召喚なんて未知の召喚方法を使われたにも関わらず、ジッと静かに赤いドラゴンを見つめていた。

その様子にまたも言い知れないモヤモヤとした気持ちを抱く。なに、なんなのこの感じは。

「フハハハハハハ、我は2枚カードを伏せターンエンドだ！ 我の圧勝は決まりきっているが、サレンダーしてもよいのだぞ？ まあ、貴様のデッキは当然貰うがな」

「誰がするか！ 僕のターン、ドローー！」

抱いたよく分からぬ気持ちに私は戸惑う。もう、なんのよ、この感じは！ 考えてもまったく分からぬことに凹、悪いから苛立ちに変わるも、デュエルはあの子のターンになつた。

「俺は手札から暗黒界の龍神 グラファを墓地に捨てトレード・インを発動！ 俺は2枚ドロー！」

暗黒界？ 聞いたことのない言葉ね。でも、トレード・インは確かにレベル8のモンスターを墓地に捨てることで2枚ドローするカードね。

「暗黒界デッキか。だが、グラファの攻撃力は2700。ダークゾーンを使つたところで我が何の対策もしていないとでも思つているのか？」

丸藤翔壱は知つてゐるみたいね。暗黒界デッキと言つからにはシリーズ物のようだけど。でも、丸藤翔壱が知つていて、私は知らないなんてなんか嫌ね。もっと広く勉強しなくちゃいけないかもしれないわね。

私が調べるのってほとんどがサイバーガール系列だから、それ以外だと試験で出るかもしない範囲しか調べないのよね。

「そりに俺は手札抹殺を発動！」

「チイツ、ロード・シンクロロンが……」

あら、また手札交換するみたいね。壁になるモンスターはいなかつたのかしら？

「俺は5枚捨てて捨てた枚数ドロー！　さらに手札抹殺で捨てられたカードの効果を発動する！　俺が捨てたのは暗黒界の龍神　グラファに暗黒界の武神　ゴルド。さらに暗黒界の軍神　シルバに暗黒界の狩人　ブラウ、暗黒界の術師　スノウ」

「2枚目のグラファだと！？」

えつ！？ 暗黒界って手札から捨てられると発動する効果だったの！？ あれ、でも、それだけだったらトレード・インで捨てた時にはなんで発動しなかったのかしら？ まだ、なにか条件がある……？

「なんだ、なんだ？ いつたいどんな効果があるんだ？」

「十代、少し落ち着きなさい。すぐに彼が効果を言ってくれるんだから」

「まったく。十代は忘れてるのかしら？ これはあなたのデッキを取り返すためのデュエルなのに、あの子が使うモンスターの効果にわくわくしちゃって、もう。そんな風に他愛もない話をしている間にモデュエルは進行していく。」

「まずグラファの効果。このカードがカードの効果によって墓地に捨てられた時、相手フィールド上に存在するカードを破壊する。俺は……俺から見て右の伏せカードを破壊！」

「ぐひ、サイクロンが！？」

グラファはフィールド上の破壊効果か……それに効果で捨てられた時、だからトレード・インだと発動しなかったわけね。

「あれ、確かに最初にグラファってモンスターを捨ててなかつたつス

か？」

「あ、そうだよな。なんであの時使わなかつたんだ？」

翔君と十代が揃つて首を傾げている。仕方ないわね。

「彼に聞いてみないと実際は分からぬけど、多分コストで捨てた場合は発動しないんじゃないかしら？　あくまで効果で捨てられる必要があるのよ。トレード・インは手札一枚をコストに発動するカードだから、多分正解だと思つわよ」

「へえ～」

「さすがは明日香さんつスね」

アカデミアの過去問に似たような問題があつたはずなのだけれど…  
…よく受かつたわね、2人とも。

「次に暗黒界の武神、軍神の効果。このカードがカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。そして、ブラウの効果はカードの効果で捨てられた時、1枚ドローだ！」

あの子のフィールドに金の斧を持った金色の骨の悪魔と銀の剣を持つ銀色の骨の悪魔が召喚される。もう一つの効果はドローだった。やっぱり暗黒界というモンスター達は手札から効果で捨てられると何らかの特殊効果を発動するみたいね。

あのデッキに安易な手札破壊なんてしたらとんでもないことになるわね。

「スノウの効果は他のカードの効果で捨てられた時、デッキから暗黒界と名の付くカードを手札に持ってくる。俺がサーチするのは暗黒界の龍神 グラファアだ！」

「3枚目だ、と！？」

フィールド破壊に蘇生、ドローにサーチって……捨てると言えできればモンスターだけでほとんど出来ちゃうじゃない。

「まだまだあ！ さらに俺は暗黒界の雷を発動！ 相手フィールド上に存在する伏せカードを破壊する！」

魔法カードにも暗黒界と付いているものもあるみたいね。スノウのサーチ範囲に入るだろうから、かなり臨機応変に対応できるわね。しかも、その魔法で破壊したのは聖なるバリア・ミラー・フォースだった。

「そして、暗黒界の雷の効果！ このカードが伏せカードを破壊した時、手札からカード一枚を墓地に捨てなければならない！ 俺はグラフアを捨てて、レッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊！」

「くつ！？」

「普通ならデメリット効果でしかないのに、暗黒界のモンスターだったらメリットに早変わりする。攻撃力3000のモンスターがあつさり破壊されてしまったわ。恐ろしいわね、暗黒界というモンスター一達は。」

「す、す」いつス！ 上級モンスターをあつとこう間に倒しちゃつたつスよ！」

「すげえ、あいつとデュエルするの楽しみになつてきた

十代はある子とデュエルしたいと目を輝かせながら決着が付こうとしているデュエルを見ている。まだあの子は通常召喚していないからレベル4以下のモンスターを召喚できれば勝ちは決まる。手札が5枚もあれば事故を起こしていなければ召喚できるでしょう。

「さらに暗黒界の取引を発動。互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドローし、その後手札を1枚捨てる。俺は暗黒界の尖兵ページを捨て、ページの効果発動！このカードが他のカードの効果で墓地に捨てられた時、フィールド上に特殊召喚する」

「これだから暗黒界はっ！？」

あの子がレベル4以下のモンスターを特殊召喚した。攻撃力は1600……レベル・ステイラーを簡単に破壊できる。これで勝ちは決まったわね。

「まだ終わりじゃないぞ。俺は墓地に存在する3枚のグラファの効果を発動！フィールド上に存在する暗黒界の龍神 グラファ以外の暗黒界と名の付くモンスターを手札に戻すことでグラファを墓地から特殊召喚だ！」

なんですってっ！？ フィールド上のカードを破壊する効果以外に

自己蘇生持ちなんて……しかも、生贊ではなくて手札に戻すからノーコストで攻撃力2700の上級モンスターが3体も並ぶなんて、なんて悪夢かしら。

「おお、すげえ。そんな効果まであるのかー！」

「ほ、僕……勝利君とは『ユエルしたくなくなつたつス

翔君、私もよ。

「さりに俺は暗黒界の門を発動！ 墓地の悪魔族1体を除外して手札から悪魔族1体を捨てることができる。俺は暗黒界の導師 セルリを捨て、セルリの効果発動！ このカードはカードの効果によって捨てられた時、相手フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。その前に門の効果で1枚ドローー！」

スノウを除外して丸藤翔壱のフィールドにマントを羽織った青い小さな悪魔が特殊召喚される。わざわざ捨ててまで相手のフィールドに特殊召喚するなんて……いつたいどんな効果があるのかしら？

「な、なにしてるんスか、勝利君つ！？」

翔君が狼狽てるけれど、見ていれば分かるはずだから口は挟まないでおく。それにしても暗黒界専用のファーリド魔法まであるなんて……墓地のモンスターを除外する必要があるけど、捨てる効果が発動する暗黒界を捨てる効果にドローまで出来るだなんて。それに墓地にモンスターがいくからコストにも困らないからとも無駄がない。

「さらにセルリの効果発動。このカードが暗黒界と名の付くカードの効果で特殊召喚が成功した時、相手は手札を1枚選択して捨てる。この場合の相手とは丸藤翔壱の相手……つまり俺となる」

おかしいわね。これならフィールド魔法で普通に捨てた方が相手にモンスターを渡さない分有利になるのに。

「俺が選択するのは暗黒界の魔神 レイン！ このカードは相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時、墓地から特殊召喚する。特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠ゾーンにあるすべてのカードが、モンスターゾーンに存在するすべてのカードかを選択して発動する。俺が選択するのはモンスターゾーンだ

!

もしかしてレインというモンスターだけ相手に捨てさせる必要があるのかしら？ レインだけ相手がコントロールするカードの効果で捨てられた時と、他とは違うみたいだし……レベルは7。扱いは難しこれど効果が使えれば中々に強力ね。

「さらに手札から陽気な葬儀屋を発動。手札にあるモンスターを3枚まで墓地に捨てることができる。俺は暗黒界の武神 ゴルドを捨て特殊召喚！ そして、暗黒界の門はフィールド上に存在する悪魔族モンスターの攻守を300ポイントアップさせる」

あの子、通常召喚を使わずにモンスターゾーンを特殊召喚だけで埋めてしまつた。それも後攻1ターン目だけで……暗黒界だからなのか、あの子だからなのか……多分、両方ね。いくらカード1枚1枚が強力でも使うのはデュエリスト。使いこなしているからこそ、暗黒界のモンスター達は存分に力を発揮できているんだわ。

「グラファ3体、レインとゴルドのダイレクトアタックだ！ 5体の合体攻撃、ダーク・ゲート・カーニバル！」

合計14400のダメージ、そして、10400のオーバーキル。その攻撃の苛烈さに丸藤翔壱は堪えきれず吹っ飛んでいく。同時に十代のデッキが散らばってしまった。モンスター達が消えるとあの子は丁寧にカードを集め、他にカードが落ちてないか確認したあとあの子を睨んでいる丸藤翔壱に目を向けた。

「約束通り返してもらひつからな」

「ぐ、クソッ！」

悔しそうに顔を背ける丸藤翔壱を見ずにあの子はまっすぐ十代に向かいデッキを差し出した。最初、私達はこの子が勝てるなんてあまり期待していなかつた。この子が負けた時は私がデュエルで取り返す氣でいたくらゐ。それが蓋を開けてみれば圧勝という結果が入つていたのだから驚きだ。

「すげえな、勝利！ そんありがとな」

「こつちもムカついたからね。それに珍しく手がよかつたからハシヤいでみたんだ……あ、そうだ。ハシャいでちょいやりすぎちまつてすまんな、翔」

「な、なんで勝利君が謝るのさ」

お礼を言つた代に彼は照れくさそうに頬を搔いて、翔君にやり過ぎたことを頭を下げて謝つた。翔君の兄弟だから氣分を害しただらうといつ配慮みたいだけど、翔君が慌ててしまつてゐるわね。

「いや、だつてあれお前の兄貴だる。弟に謝るのは変じやないと思つが?」

「や、そつなのかな?」

この子、天然なのかしら? なんの疑問も持たず主張するものだから翔君が納得しかけてしまつてゐる。でも、翔君は少し考えたあと大きく頭を振つた。

「だけど今回のは翔壹兄さんが悪いんだし、勝利君が謝ることじやないよー。」

「そつ言つてくれると助かるかな」

翔君の言葉にふんわりと安堵するよつて頬を緩める姿に、あの理不尽なまでの効果でオーバーキルするよつな子には見えないから不思

議よね。和やかな空氣に私達が浸つているとカツカツカツと音が廊下から響いてきた。これは……まずいつ！？

「ガードマンが来たわ。夜間に出来た上に施設の利用がバレたら下手したら退学よ」

「ひえー？ そつなのか？」

「あなた、生徒手帳を読んでないの？ ちやんと書いてあるわよ」

私がガードマンが来る」とを告げると十代が驚いていた。もう、ちゃんと読みなさいよ。ふと横を見ると私を見て驚いているあの子がいた。意外ね。この子ならちゃんと読んでると思ったんだけど……。

「君、いたの？」

「気付いてなかつたのッー？」

あの子の口にした言葉に私は思わず声を荒げてしまったけど、そんなことをしている場合じやなかつたわ。私は十代達を連れてオベリスクブルーのデュエル場から脱出した。

無事に丸藤翔壱から十代のデッキを取り戻した俺は、何故かいたあの時の女の子に連れられて十代と翔の2人と一緒にガードマンに見つからないように逃げ出した。

「ふう、ここまで来たら安全ね。それにしてもあなた、丸藤翔壱に勝つなんてすごいじゃない」「

「今回は偶然だよ。引きがとてもよかつたから出来たことで……本来ならグラファで耐えながらキーカードが来るのを待つつもりだったからね。トレード・インで手札抹殺が引けて良かつたよ」

女の子に褒められたけど、トレード・インで手札抹殺を引けて本当に運がよかつた。レッド・デーモンズに殴り勝てるカードが来るか手札を捨てるカードとカーキカグラファが手札に揃うまで耐えるつもりだったし。

しかし、なんだ。女の子に褒められたのは初めてだけど、これは照れくさい。

「そうつス。兄貴を倒したモンスターじゃなかつたつスけど、攻撃力3000のモンスターを倒したんスから」

俺が照れながら女の子と話していると、翔が興奮しながら喋る。ん？ 十代は違つたのか。

「そういえば十代はどんなモンスターにやられたんだ？ 俺とは違うみたいだけど」

「白いドラゴンで、スターダスト・ドラゴン／バスターって名前だつたな。勝利が破壊したレッド・デーモンズ・ドラゴンと攻撃力が同じだ。効果がそのモンスターを生贊にする事で魔法、罠、モンスターの効果を無効にして破壊してくるんだ。しかも、そのターンのエンドフェイズに自己蘇生する効果もあつて手も足も出なかつたぜ」

うわ、よりもよつてスターダスト・ドラゴン／バスターか。あれ、俺嫌いなんだよな。ゲームのCPUにしか使われたことないんだが、出された後は一方的にぼこられて終わつたな。対処できるカードは入つてるけど1枚だけだから、中々引けずに攻撃力3000だから戦闘破壊は厳しい。暗黒界は素だと2700が最高だからな。

しかも、戦闘破壊したらスターダストが帰つてくるし、もつ最悪。

「最悪だな。まあ、そいつが出てきてもあの手札ならどうにかなつたか？　いや、手札抹殺が無効にされてたらちときつかったか下手したら負けてたな。レッド・テーモンズ・ドラゴンで良かったなあ、ほんとに」

いや、トレード・インの時に出てこなかつたらまだ大丈夫だつたか？　暗黒界と割れても手札抹殺を使つちゃえバスター・モードをチューんして連れてきても無効にされるのは恐らくグラファの破壊する効果だろうから除去したも同然だし……あとはあのまま攻め切れればビリにかなつたな。

俺が色々とバスターの攻略をあの手札状況で考えていると。

「と、ひるでそろそろ帰つた方がいいわよ。明日も授業があるんだから

「え、あ、そうだな。えつと……」

女の子が帰つた方がいいと言つてきたので同意したんだけど……女の子の名前を知らなかつたため俺は口ごもつた。

「天上院明日香よ。好きに呼んでくれていいわ」

「わかった。天上院さんと呼ばせてもらひな、俺は高峰勝利。」  
「ちも好きに呼んでくれていいよ」

俺が口じりもつた理由を察した女の子……天上院さんが自己紹介してくれた。女の子の名前を呼ぶのは恥ずかしいから苗字呼びだけど、一応友達になつたでいいのかな？ だつたらいいな。

「私は勝利と名前で呼ばせてもらひうわね」

「いいよ。俺は苗字呼びだけどいいよね？」

つと天上院さんにいきなり名前を呼ばれて恥ずかしくなるが、それを表に出すのも恥ずかしかつたので、平静を一生懸命保つて対応した。

「ええ、構わないわ」

「それじゃ、十代に翔。また明日な」

でも、それが長く続かないだろ」とは自分の事だから当然で逃げるよつに帰る選択をする。まだ道を覚えてないのでPDAを操作して地図を呼び出す。

「おひ、また明日な。約束忘れんなよ」

「おー。天上院さんもおやすみ」

「ええ、おやすみなさい。勝利」

「勝利君、また明日つスー」

十代から返事を貰い、天上院さんとも別れの挨拶を交わしたあと俺は心持ち早足でイエロー寮に帰り着いた。そのあと、初めての女の子の友達が出来たことにニヤケてしまい眠れず、翌日の授業中に寝てしまい先生に怒られてしまった。

シンクロモンスターは十代とオリ主の敵限定で、オリ主に使わせる  
気はまったくありません。

敵と言つても今話の丸藤翔壱みたいな原作キャラを見下して私生活  
でも敵対しそうなキャラから、私生活は良好な関係でもデュエルの  
時は対戦相手という場合もあります。

使って欲しいシンクロモンスターかエクシーズモンスターが居まし  
たら感想で書いていただければ敵側の切り札として使わせます。た  
だし、勝敗についての文句は受け付けませんのであしからず。

あとオリジナルカードは無しでお願いします。

感想で、オリカ有り・無しのタグが欲しいとあります、読んでくれていての皆さんに質問です。

作中にはすでに『一本釣り』とこうオリカの存在があることを出してしまいました。

それでも『デュエル』でそうこうした作者の自作したオリカは出さないつもりです。出すとしても日常の1コマ程度です。

ですが、『デュエル』で使わないと言つても、その存在を作中で書いてしまつたので『オリカ無し』のタグを使って本当にいいのかと軽い疑問があり、どうかを付けるべきか助言を貰いたいと思います。

感想無しでも、どうにすべきかの意見がありましたら遠慮なく書いてください。

では、十代戦です。どうぞ。

夜中のアンティデュエルから2日。表面的には平和な日々が流れる。デュエルについての座学に、体育、鍊金術なんてものもあった。

鍊金術の授業の後に大徳寺先生の猫、ファラオを抱かせてもらえたのが嬉しかったな。レッド寮が羨ましく思えたぞ。うちの寮も猫がいたらなあ。

ああ、そうだ。表面的にはと言つた理由はあれからずつと丸藤翔壹に睨まれ続けているからだな。恐らく暗黒界デッキを使って一気に潰したのを根に持つてゐようだ。それか同類と氣づかれたかのどちらかだ。

確かグラファのストラクチャーはこの世界の未来を舞台にしたアニメが始まつた頃に発売したものだから。それで気付いても仕がない。これからはデッキを複数持ち歩くかな……アイツにデュエルを挑まれた時を考えて。

アイツの性格からして暗黒界主軸のあのデッキに対するアンチデッキを組んでくるだろうし、弱点は割りと容易に想像つくからな。フィールド破壊系は暗黒界に依存してゐるから一度張られたらもう打つ手なしになるから確実に負けるだろうし。

そういうや、主人公が誰かわかつたな。丸藤翔壱から取り返した十代のデッキ……散らばつたのを集めた時にE・HEROが目に入った。俺みたいな存在じゃない限りE・HEROを使う人物が主人公のはずだから。

これで十代がガツチャとか言つたらもう確定……疑いようもなく十代が主人公だろう。うーん、主人公に関わる気はなかつたけど丸藤翔壱みたいなのがいるのを考えるとそれなりにアドバイスした方がいいか？

それに友達になつたんだから見て見ぬフリは後味悪すぎだ。それに集めた時に見た感じだと基本的なカードしか入つてなかつたからな。融合体なんてフレイム・ウイングマンとサンダー・ジャイアント、ランパートガンナーの3体しかいなかつたし。いくらなんでも少なすぎる。

まあ、学校でパックを売つてるから徐々にえてくんだろうけど……：それだと丸藤翔壱みたいなのが現れた時なんかだと対応しきれないだろうな。

E・HEROがシンクロと互角に戦えるのも豊富な融合体を使つた柔軟な戦術有つてこそ。3枚じゃあシンクロを使うデッキには力不足だ。俺や翔壱以外にはいないとは限らないんだし、俺みたいに味方なんて楽観視もできない。丸藤翔壱という前例があるんだから。

まあ、まだ十代が主人公だと確定したわけじゃないし気にかける程度でいいのかもしれんが。一応、欲しいか聞いてみるかな……余分にあるの見繕つておこう。あ、どうせなら面白い方がいいし、サプライズを仕掛けてから聞いてみるか。

今後の方針を決めた俺はイエロー寮の食堂で野菜中心に食べていた。肉はあんまり好きじゃないから全然苦ではない。太った原因はお米の食べ過ぎだしね。塩むすびって美味しいよね、異論は認めるが否定はさせない！

「おや、勝利。肉は食べないのかい？」

「大地か。いや、肉って言つてもレバーだよね、それ。レバーはちよつと……」

「ならこれはどうだい？」

話しかけてきた彼は三沢大地。入試で1位の成績を叩き出した人だ。気さくで人当たりもいい人物で入寮した翌日に親しくなった。そんな彼が差し出したのはソーセージだった。

「あ、1本貰うね」

箸でつまみ上げてカリッと一口食べる。うん、美味しいかも……ち  
ょつとクセがあるけど。

「それはレバーペーストと言つて、ウサギの肝臓をすり潰してソ  
セージにしたものだよ」

「ゴホッ！？」

「だ、大丈夫かい？」

う、ウサギの肝臓つ！？ いや、名前からしてレバーの料理の一種  
みたいだから肝臓で間違つてないけど、ウサギつ！？

むせた俺は大地に背中をさすられて落ち着きを取り戻す。

「大地、ただレバーを使ったソーセージって説明だけでよかつたん  
じやないか？」

「そ、そつか？」

周囲を見れば件のソーセージを無言で皿に戻す生徒がちらちらいる。うん、ウサギが材料つてびっくりするよね。こんな風に友人をどんどん作つて充実した学校生活を送つていい。

月一テストの一週間前の日曜日、俺はレッド寮にやつてきていた。初日に十代と約束したデュエルをやりにだ。しかし、レッド寮の印象は一言、アパートみたい。いや、実際にアパートなんだろつねど、イエロー寮と比べると……何も言つまい。

「おつ！ 勝利ー！」

「いらっしゃー！」

翔と十代がレッド寮の2階から手を振つている。歓迎されるのつてやっぱり嬉しい。手を振り返しながら寮まで歩いていくと、駆け下りてくる十代と翔は別段変じやないが……。

「おはよつ、勝利」

「え、あ、おはよつ天上院さん」

なんで天上院さんもいるの？ それと後2人つて……。

「あら、IJの坊やがあの坊やとヒュエルするのね」

「そうよ、雪乃。紹介するわね。彼女が藤原雪乃で、IJの子は樋口桜よ。2人とも中等部からの友人なの」

薄紫色の髪をツインテールにしたのが藤原さん、赤に近い紫色の髪を力チユーシャで止めているのが樋口さん。藤原さんはツリ目がちで勝ち気そうな女の子で、樋口さんはおつとりとした大人しめな女の子だった。

といふか見たことがある……TFで戦えるヒュエルリストだ。学生服だつたけど、この時代にいるんだ。まあ、TFの最初の舞台はGXだつたはずだからいてもおかしくはないのだろう、多分。

「藤原雪乃よ。よろしく、坊や」

「樋口桜です。よひじくお願ひします」

「高峰勝利です。藤原さん、樋口さん、よひじくお願ひします」

「あら、名前で呼んでも構わないわよ？」

「画面越しだと特に何も思わなかつたけど、生で見るとすこし。自分で自分の顔が赤くなつてるのがわかる。」

「いや、恥ずかしいから藤原さんで……」

「赤くなつちやつて可愛いわね、坊や」

クスクスと楽しそうに笑う藤原さんに、俺は居心地が悪くなる。天上院さんはまたかという表情で藤原さんを見ていることからこれが標準なんだろう、藤原さんの。樋口さんは大人しいが……つて、寝てるつ！？

「あ、桜。立つたまま寝るなんて器用ね。ほひ、起きあ！」

「ふあ……ねはよひ」れこます、明日香わふ

「おはよ」

天上院さんが慣れた様子で樋口さんを起こす。藤原さんも特に気にしないようでこれも日常なんだらう。そういうえば十代が来ない。距離なんて離れてないはずなんだが……寮に視線を向ければ、天上院さんにそっくりな女の子が十代に話しかけていた。

「えつと、天上院さん。あの子は？」

「え？　あ、あの子何してるのよ。つと、あの子は私の双子の妹よ。名前は茜よ」

妹居なんだ。なんか引っかかるけど、よく分かんないから大して重要じゃないな。

「茜つー」

「え、お姉ちゃんつー…？」

天上院さん……「、どうも天上院さんだけど。お姉さんの呼び声に妹さんは驚いたように振り向いた。あ、右耳付近の髪に白いリボンがある。今回限りリボンで見分けがつくな。……まあ、他の部分で違いがあるけどさすがにその部分で判断するのは気が引ける。

「の部分かって？ お姉さんと比べて妹さんは胸が控えめなんだ。さすがに女の子の胸でどうちか判別するなんてしたくない。が、間違えるのも失礼だし最終手段にしておこう。

「あなた、今日は用事があるって言つたのにどうしてこんなに？ もしかしてここに来るのが用事だったの？」

「お姉ちゃん、どうしてこんなところなの？」

「十代と彼のトコノルを見に来ただけよ」

お姉さんの方の天上院さんが……って、もう心の中だけ名前呼びでいいや。ややこしい。明日香さんが茜さんに俺のことを話している。茜さんは俺のことを訝しげに見つめ……いや、睨んでくる。あれえ？ 俺、睨まれるようなことしたっけ？

「誰？」

「高峰勝利君。見ての通りラーライドロードの生徒よ

「ふ〜ん」

うん、なんか良い印象なさそうだ。俺は取り敢えずペーントと頭を下げるが、十代の方に向かう。

「待つてたぜ、勝利。さつそくやひまかー。」

「あ、うん。よろしく、十代」

ワクワクして待ちきれないと言わんばかりに笑顔で話しかけてきた。もう、デュアルディスクにはデッキがセットされている。

「冗談、応援してるっスよー！」

「おーひー！」

ん〜、ちょっと雑談してからと考へてたけど十代はもうやる気満々だ。気勢を削ぐのは気が引けるし、ギャラリーまでいるんだから待

たせるのも悪いな。俺と十代は寮の近くにある崖の下まで向かう。ギャラリーは崖の上から観覧だ。

あ、十代に言つておかない。

「十代！ 今回、俺が使つのはあの夜のとは違つテッキだからなー！」

「そうなのか？ まあ、なんでもいいや。『デュエルだ！』

言わなくとも大して変わらなかつたかな、こりや。俺と十代は互いにデュエルティスクを構える。そして、示し合わせたよつこ……。

『デュエル！』

互いに開始の合図を叫んだ。

ついに兄貴と勝利君のデュエルが始まったっス。

「俺から行くぜーー ドローーー！」

先行は兄貴みたいつス。それにしても勝利君のデッキはなんなのか  
気になるつス。

「俺はE・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚し、1枚伏せ  
てターンエンドだ！」

「十代君頑張つてー！」

明日香さんの双子の妹の茜さんが兄貴に声援をかける。羨ましいっ  
スよ、兄貴。

「じゃ、俺のターン、ドローーー 俺はE・HERO フォレストマ  
ンを守備表示で召喚」

「おおつー 知らないHEROだー！」

勝利君が召喚したのは緑色の肌にスキンヘッドのHEROだ。今回の勝利君のデッキは兄貴と同じHEROデッキみたいっス。

「さりに手札から融合を発動！ 手札のフェザーマンとバーストレイディを融合ー！」

「来るか、フレイム・ワイングマンつー！」

「E・HERO ノヴァマスターを融合召喚ー！」

勝利君は赤いマントを羽織った赤と黄色の鎧を着たモンスターを召喚した。兄貴の予想は外れたみたいだけど、兄貴は勝利君が召喚したモンスターに目を輝かせてるつス。そんな僕も兄貴の気持ちがよくわかるつス。

「あれは……やつぱり」

「やつぱりって何がよ、茜」

「ん？ なんでもないよ、お姉ちゃん」

明日香さんと茜さんが何か話してゐみたい。スケビ、勝利君は戦闘するみたい。

「バトルだ！ ノヴァマスターでスパークマンを攻撃！ プロミネンス・ノヴァ！」

「くつ、スパークマンが破壊された時、リバースカード発動！ ヒーロー・シグナル！」

勝利君のモンスターが真つ赤な炎の球体を兄貴のスパークマンに投げつけ、スパークマンは爆散してしまった。けれど土煙を切り裂くようにシグナルが崖の岩壁に照らされる。

「自分フィールド上のモンスターが戦闘で破壊された時に発動することができる。自分の手札またはデッキからE・HEROという名のついたレベル4以下のモンスターを特殊召喚ができる。俺はバーストレディを特殊召喚だ」

「なら俺はノヴァマスターの効果を発動する。このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、デッキからカードを1枚ドローする。俺はメイン2でカードを1枚伏せてターンエンドだ」

勝利君の場には攻撃力2600の上級モンスターがいるのに対して兄貴の場にはバーストレーディだけ。最初のターンからピンチっス。

「あらあら、レッドの坊や。大丈夫かしらね」

「いきなり攻撃力2000オーバーのモンスターですかね」

「十代君なら大丈夫です！」

「確かに茜の言つとおり十代ならなんとかしそうね」

僕も茜さんと明日香さんに同意見つス。

「く～、カッコいいな。勝利！」

「E・HEROの中じゃ、こいつが一番好きだからな。そう言つてもうひとつ嬉しいよ

「そつか。でも、勝たせてもらうからな！俺のターン、ドロー！俺は融合を発動！ フィールドのバーストレーディと手札のフェザ

「マンを融合！　来い俺のマイフェイバリット、フレイム・ウイングマン！」

「出たつス。兄貴のエースモンスター！　しかも、ここで出したといふことは……。」

「さらりにフィールド魔法、摩天楼スカイスクレイパーを発動！」

「周囲の景色が高層ビルが立ち並ぶ風景に変わる。HEROが主役の舞台が整つた。」

「摩天楼スカイスクレイパーはE・HEROと名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象のモンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！　バトル！　フレイム・ウイングマンでノヴァマスターを攻撃！　スカイスクレイパーシート！」

「甘いぞ、十代！　俺はフレイム・ウイングマンの攻撃宣言時にリバースカード発動！　燃える闘志！　発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターに装備する！」

燃える闘志つスか？ 装備カードになる罠なんて珍しいつスね。どんな効果なんだろう？

「元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在する場合、装備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の倍になる！」

「えっと、2600の倍だから……5200つ！？」

「ご、5200つスか！？」 フレイム・ウイングマンはスカイスクレイパーの効果で3100ポイント……元々よりも1000ポイントアップしてるので効果が適用されるつス。

「灼き尽くせ、ノヴァマスター！ エンシント・ノヴァ！」

「ぐうう、フレイム・ウイングマン！？ くつ、俺はハネクリボーを守備表示で召喚し、悪夢の蜃氣楼を発動してエンドだ」

兄貴のフレイム・ウイングマンがノヴァマスターが放つた巨大な炎の弾に飲み込まれて破壊される。兄貴のライフは残り900……ハ

ネクリボーのおかげで1ターンだけ耐えれるけど、もう後がない。

「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。墓地またはデッキから融合を1枚手札に加えることができる。俺は墓地から融合を回収する」

「こ」の時、悪夢の蜃気楼の効果発動。俺は手札が4枚になるようドローする

「俺はノヴァマスターでハネクリボーに攻撃！」

勝利君のモンスターによってハネクリボーが破壊されたっス。フォレストマンの攻撃力は1000で兄貴のライフは900とハネクリボーが居なかつたら負けてたつス。

「俺はノヴァマスターの効果でドローして……ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！　俺のスタンバイフェイズ時、悪夢の蜃気楼の効果。このカードの効果でドローした枚数分、俺は手札をランダムに捨てる！」

兄貴の手札が4枚も墓地に……。

「「「」がレッドの坊やの正念場ね。何が残るか……」

「「「、ドキドキですか」

「……十代君」

兄貴つ！

「残ったカードは……強欲な壺！ 僕は2枚ドローして、さらに天使の施しを発動！ 2枚捨てて、残った2枚を伏せてターンエンドだ！」

「「「」でその2枚を引くか。どう出るか楽しみだ。俺のターン、ドロー！」

「悪夢の蜃氣楼の効果で4枚ドロー！」

「フォレストマンを攻撃表示にして、バトルだ！」

あれ、勝利君。手札が6枚もあるのにモンスターを出さないのはなんでつスか？

「変ね。イエローの坊や。手札は十分なのに何もしなかつたわね」

「そうですね～。なんででしょう?」

「うう、きっと十代君を舐めて手加減してるのよ!」

「西。憶測だけで決めつけたら駄目よ。きっと何か考えがあるのよ」

勝利君は悪い人じやないから兄貴を舐めて手加減するなんて有り得ないつスよ!

「案外、イエローの坊や……手札事故でも起こしたんじゃないかしらね?」

雪乃さんが何か言つてるつスけど、声が小さくて聞き取れなかつたつス。そんなことより勝利君のモンスターが兄貴に攻撃をしようとしてる……兄貴!

「俺はノヴァマスターの攻撃に対しリバースカード発動! ヒー

口一見参！ このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分の手札から相手はカードをランダムに1枚選択する。選択したカードがモンスターだった場合、自分フィールド上に特殊召喚をする……違う場合は選択されたカードを墓地に送る。さあ、選べ勝利！』

「俺が選ぶのは十代から見て右から2番田だ」

「よつしゃあ。勝利が選んだのはモンスターだ。俺はE・HEROバブルマンを攻撃表示で召喚だ！」

「ああ、兄貴。攻撃表示だなんて……何を考えてるんスか？」

「さらに俺はリバースカード発動！ バブル・シャッフルを発動！」

「なにつ！？」

「このカードはバブルマンがフィールド上に表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するバブルマン1体と相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。守備表示にしたバブルマン1体を生贊にし、E・HEROと名のついたモンスター1体を手札から特殊召喚する！」

だから兄貴はバブルマンを攻撃表示で召喚したんスね。

「俺が選択するのはノヴァマスターだ！ そして、バブルマンを生贊にし、手札からE・HERO ハッジマンを特殊召喚だ！」

「いいでか……俺はメイン2で1枚伏せてターンエンドだ」

次のターン、ハッジマンで勝利君のノヴァマスターを倒せるつス。

「レッドの坊や。やるじやない……だけど、次のターンは手札がゼロから始めなくちゃいけないから」

「はい。高峰さんの伏せカードによつて決まりますね」

「う、どうもす」いつス。

「俺のターン、ドロー！ いいで俺は速攻魔法、非常食を発動！ 悪夢の蜃気楼を破壊し、俺はライフを1000ポイント回復する。これによつて俺は手札を捨てなくてよくなれるー！」

兄貴が悪夢の蜃氣楼を破壊して、わらにライフを回復させる…… さすがは兄貴っスよ。手札は2枚でもきっとなんとかしてくれるはずス！

「そして俺はカードを1枚伏せて…… 天よりの宝札を発動！ 互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。俺の手札は0枚、よつて6枚ドロー！」

「なつ、ここで最強の手札増強力カードだつて！？」

勝利君の手札は5枚…… だから1枚のみのドロー。だけど、兄貴は6枚もドローした。この土壇場でみんなカードを引くなんて兄貴はやつぱりすごいっス！

「行くぜ。俺はサイクロンを手札から発動！ 伏せカードを破壊！」

「次元幽閉がやられたか……」

次元幽閉？ なんか物騒な名前っスけど、聞いたことがないカード

つス。

「次元幽閉？」

あ、明日香さんも雪乃さんも、桜さんも首を傾げてるつス。僕だけ知らないカードじゃなかつたみたいつスね。

「もう。みんな知らないの？ 次元幽閉は相手モンスターの攻撃宣言の時に発動できて、その攻撃モンスターを除外する罠カードだよ。破裂装甲の除外するタイプだね」

「詳しいわね、茜」

「えへへ」

なるほどつス。ということは破壊しなかつたら兄貴のエッジマンが除外されてたつスから……あ、危なかつたじやないつスかつ！？

「さらに俺は手札から融合を発動！ フィールドのエッジマンと手札のワイルドマンを融合！ 来い！ E・HERO ワイルドジャ

ギーマン！

兄貴の場から金色のモンスター、エッジマンと浅黒い肌のアマゾンに住んでそうなモンスターが融合して、金色の鎧を頭と左腕、腰につけた浅黒い肌のモンスターが召喚された。攻撃力2600で勝利君のモンスターと並んだ！ しかも、勝利君のモンスターは守備表示で2100の守備力っス！

「さりに手札からクレイマンを召喚し、リバースカード発動！ ミラクル・フュージョン！ 自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、E・HEROと名のついた融合モンスター1体を融合召喚扱いとして特殊召喚する。俺はフィールドのクレイマンと墓地のスペーカマンを融合……来い、E・HERO サンダー・ジャイアント！」

「凄まじいな……フォレストマンを攻撃表示にしたのは失敗だったか

勝利君には兄貴も言われたくないと思うっス。暗黒界のあの展開力に比べたら兄貴のはまだ優しい方っスよ。

「行くぞ、勝利！」

「おひ、ドンと来いだ！」

「ワイルドジャギーマンでフォレストマンを攻撃！ インフィニティ・エッジ・スライサー！」

これで勝利君のライフは2400っス。サンダージャイアントで勝利君のモンスターを破壊すれば……。

「さりにワイルドジャギーマンのモンスター効果！ このカードは相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃する事ができる。ワイルドジャギーマンでノヴァマスターを攻撃！ インフィニティ・エッジ・スライサー！」

「くつ……」

「最後だ！ サンダー・ジャイアントで勝利にダイレクトアタック！ ボルティック・サンダー！」

勝利君のライフは2400……サンダー・ジャイアントの攻撃力も2400。ワイルドジャギーマンにあんな効果があつたなんて知らなかつたっス。電気のような光線が勝利君目掛けて走つていき……。

「ぐりううううー?」

勝利君のライフは0になつて、周囲にそびえ立つていたビル群は消え、兄貴のモンスターも消えたつス。

「なんて引きの強さ……ゾクゾクしちゃうわね」

「すいですう」

「やつたね、十代君ー」

「あそこで逆転するなんて……やつぱり興味深いわね」

膝を付いた勝利君に兄貴は……。

「ガツチャー 楽しいデュエルだつたぜ、勝利!」

「……ああ、俺もだ」

一瞬、勝利君は呆けたように兄貴を見てたつスが、すぐに笑顔になつて立ち上がつて、僕らの方に兄貴と一緒に登つてきたつス。僕らの近くに来た時は兄貴が勝利君にお礼を言つてたけど、どうしたんスかね？

## TURN - 04【vs十代】（後書き）

十代戦でした。ちなみに十代vs明日香があつた覗き事件はもう解決します。

主人公、イエロー生ですから。レッド生なら同じ寮と云ふことで一緒に行つたんでしょうけどね。

その場にいなかつたら十代のことだからやつと一人で行くでしょうし。こうなりました。

## TURN-05【類似存在との初コンタクト】（前書き）

つこにタイトル通りに初コンタクトです。

ではじめ。

十代と『テコノル』を終えて俺は当の十代にカードを見せていた。もちろん、先ほど使った『属性ヒーロー』だ。

「おお、どれもカッコいいな！」

「だろ？ その中でも俺のイチ押しさノヴァマスターだ。ドロー加速の効果もあるし、攻撃力も高いからな」

『デュエル』中を使った燃える闘志なんて『コイツ』のために入れてみると、なもんだしな。炎のヒーローが闘志を燃やして強大な敵を打倒する……特撮ヒーローみたいな展開に似てるしな。

「なあ、ほんとにいいのか？」

「ああ、余ってるからな。ただ、使いすぎは要注意な。特に使いすぎに注意なのは『ZERO』だ」

俺は氷のE・HEROを見せる。E・HERO アブソルートZERO

ROだ。このカードの効果は、このカード以外に水属性モンスターが存在すれば攻撃力が水属性モンスター1体につき500もアップする。元々の攻撃力が2500だから1体でもいれば3000となる。

この世界だとそれだけで強力なカードだが、もつとも恐るべき効果はフィールドから離れるだけで禁止カードに指定されているサンダーボルトと同じ効果が発揮されることだ。戦闘で破壊しても、エクストラデッキに戻しても、除外しても発動するのだから質が悪い。

ただ、破壊効果なのでスター・ダストに無効化されるが……俺や丸藤翔壱みたいな存在でない限り、このカードとE・HEROの展開力を考えれば負ける事はまずないだろう。まあ、パーティションが相手ならカウンターで無効化されるだろうけど。ビートが好まれるこの世界じゃ、まず目にする事はないだろう。

「理由なんだが、E・HEROの展開力とZEROの効果が合わさると一方的なデュエルになるからな……相手からしたら理不尽だと思われる」

「確かに一方的なのは俺も楽しくないからな」

「そうだろ？ ただ、あの時の夜みたいに負けたら大事なデッキが盗られるかもしれない時は躊躇するなよ？」

この世界の人達にとつて、デッキを構成するカードは何よりの宝らじ  
いからな……まあ、例外もいるっちゃあいるが、基本的にそうだと  
俺は思つていい。

「おう！」

十代が嬉しそうに俺が渡したE・HERO達を、デッキケースにしま  
う……あ、そうだ。

「それとなんだが、一応これも渡しとく」

「D・D・クロウ？」

「ああ。丸藤翔壱が十代に使つたモンスターの効果は、こいつなら  
対処できるはずだからな。それに闇だからエスクリダオの素材にも  
なるし」

このカードはE・HEROとは関係ないが、スターダストを排除す  
るには打つてつけだ。罠カードのロストとどっちがいいか迷つたけ  
ど、E・HERO エスクリダオの素材にもなるこっちを選んだ。  
闇のE・HEROってネクロダークマンを除くとみんな融合体だか

らな。

「お、サンキュー。こんなに貰つてしまつてなんか悪いな」

「俺より十代に使つてもらつた方がここにいらも嬉しいと思つしな」

なんせ元祖E・HERO使いだらうからな。十代がいなきやE・HEROは生まれもしなかつただろうし、こいつらも喜ぶに違いない。喜ぶで思い出したが、GXからデュエルモンスターZの精霊が物語に絡んでくるんだよな。主人公……十代にもいたはずだけど。うん、見当たらない。

見当たらぬいつて事は俺には見る能力がないいつて事だな。こいつのは定番として先天的な能力だから諦めるしかないよなあ。まあ、あつたらあつたで厄介事が向こうからやつてきそう予感がするし……うん、無くてよかつたかも。

「うおおお、早く召喚してみてえ！ なあ、勝利。もう一度やらな  
いか？」

「そうだね……じゃあ

「ちよつとこい？」

十代から嬉々としてデュエルを申し込まれたが、横から妹の方の天  
上院さん……茜さんが声をかけてきた。十代に用なのかと思い、俺  
は特に何の反応もしなかったが……。

「高峰君にちょっと聞きたいことがあるんだけど、十代君。高峰君  
を借りていい？」

「うーん、勝利ともう一回デュエルしたいんだけどなあ

「そこをお願い！」

「まあ、茜がくれた天よりの宝札で勝利に勝つ」と出来たからな。  
いいぜ。そんじゃ勝利、また後でな！」

どうやら俺に用があつたらしい。というかあの時の宝札って茜さんが十代にあげたものようだ。あれさえなかつたら俺の勝ちだつたからなあ。まあ、十代が原作主人公だつて確信持てたからいいけど。

「で、聞きたい事つて何かな？」

ちょっと横道に逸れた意識を軌道修正して西さとに聞い掛けると、思いも寄らない言葉が彼女の口から飛び出した。

「高峰君って転生者よね？」

「は？」

え、転生者？ 特に死んだ記憶はないんだけど……というか転生ならどうやってカードとか持ち込むのだろうか？ って、よく考えなぐても彼女がそういう存在だって事の裏付けになるよな。そういうなかつたらこんな事普通は言いく出せないし。

「言いつてる意味がよく分かんないんだけど……自分が死んだ記憶なんてないし」

「とぼけるの？ 十代君以外でE・HEROを……しかも、漫画でしか出てきていない属性HEROを使ったのがいい証拠よ

ああ、だからそんな自信満々で言いつてるんだ。俺はつきり十代がまだ手に入れてないだけかと思つてたんだけど……というかGXの漫画なんてあつたんだ。

しかし、彼女をどう納得させよ。そういうえば一次の小説とかだと俺みたいなのを、確か……そう、そうだ。トリッパーって言つたはずだ。

「いや、とほけてないよ。ほんとに死んだ記憶がないんだ。まあ、君が納得できる答えとしたらトリッパーじゃないかな？」

「トリッパー？ ああっ！？ その可能性を失念してたわ」

「うん、納得してくれたみたいだ。それはよかつたんだが、こちらからも確認しなくちゃいけない。」

「で、君は転生者なの？」

「……そうよ。通り魔に襲われた後に目が覚めたら赤ちゃんだったわ

俺に人を見る目は……正直言つて無いが、嘘は言つてないだろ、多分きっと。まあ、俺も非常識な体験してるし、転生も絶対に無いとは言えないんだよな。否定するなんならそもそもなんで俺がここに

いるのかって話になるし。

「後知りたいんだが、なんでわざわざ俺にそんなこと確認したんだ？ 普通は頭が残念な人だつて思われるぞ。それに当たつてたとしてもどうなるのか分からぬだろ？」

まあ、後はなんで正体……正体だよな？ 似た存在なら正体が容易に理解されるような軽率な行動に出た理由を聞く。少なくとも立場的に同類だらう丸藤翔壱を例に挙げれば……俺は絶対に近付きたくないし、きっと知られれば何かしら動きがあつて面倒な事になりそうだし。

「大丈夫よ。あの腐れ馬鹿と違つて十代君に好意的だつたもの」

「腐れ馬鹿？」

「丸藤翔壱よ。シンクロの無い世界で、非公式だけだとあんな堂々と使うなんて馬鹿としか言えないでしょ」

あ～、うん。そこは同意するよ。邪神とか時械神とか所持してゐる俺が言つても説得力の欠片もないけどな。ちょつといい機会だし、聞いてみるか。

「聞きたいんだけど、俺や天上い……」

「あ、私の事は茜つて名前でいいわよ。お姉ちゃんもいるからややこしいし」

「いや、女の子を名前で呼ぶなんて氣恥ずかしいからこのままで」

俺が呼び方の件で断れば、その理由にそれにつきものなののかといまいチ納得できない天上院茜さんに改めて聞く。

「俺や天上院さん、丸藤翔壱みたいな存在つて他にもいるかな？」

まあ、いて欲しくないのが正直なところだけど。

「こりわよ。ただ、さすがに全員は把握していないわね。ちなみに全員が仲間つてわけじゃないから、そこは注意してね」

「どうこりわ」と。

俺が彼女の言葉に素直に疑問を口にすると、すぐ嫌そうに顔をしかめる。

「それはね、丸藤翔壱みたいな周りを見下して女漁りが目的みたいのがわんさかいるもの。十代君を……言い方が悪いけど主人公だからって理由で田の敵にするとかね」

「……わんさか？」

「うん、わんさか」

なんて悪夢。あんなのがわんさかいるのか、地獄だろ。十代に属性HERO渡して正解だつたかもな。いや、それだけじゃ安心できないかもしけんが……。アカデミアに入学したの、早まつたかもしけん。

それに十代も可哀想に。自分じゃどうにもならない事で田の敵にされるなんて、俺が当事者だつたら勘弁して欲しい状況だ。

「私が把握してるので7人。どいつもこいつも人の胸を可哀想なモノでも見るような目で……あ、腹が立つっ！」

「えっと……」

凄まじくコメントのし辛い事を……って、待てよ。これだと彼女、普通にバレバレ？

「も一つ質問。天上院さんって同じ立場の人間だつて知られてるの？」

「当たり前じやない。お姉ちゃん……天上院明日香には兄が一人いるだけよ。原作じや双子の妹なんていなかつたんだから、いたらそれが転生者だつて疑うのは当然でしょ」

「……そうだつたかあ」

もしかしてこれが引っかかった原因か？ 多分、そうだな。俺が茜さんを見て何に引っかかったのか納得していると。

「ねえ、高峰君つて原作知識どれくらいあるの？」

「一期までで、主人公がガツチャを決め台詞にE・HEROを使うこと。最後は三幻魔を主人公が倒すつてくらいかな。ああ、あと敵

の一人が吸血鬼つてへらいか?」

「……それだけ?」

「うふ、それだけ」

あれ、なんか茜さん……すうじく微妙な顔してないか? 僕、おかしなこと言つてないはずだが……。

「ほとんど知らないってことじやない。穴あきだらけにもほびがあるわよ」

「いや、何年前だと思つてんだよ。見てたのなんて5、6年前だぞ」

「え? まだ完結して半年しか経つてないはずだけど……」

は? なんだつて?

「それせびつこいつ……」

「茜へ! 帰るわよ」

「」の話はまた今度ね。お姉ちゃんに呼ばれてるから、じゃ

俺がどうこう事か確認しようとするが、天上院明日香さんの茜さんを呼ぶ声がして、彼女は慌てて出て行つてしまつ。半年つて……最低でも3年は経つてゐるはずだぞ。俺は一期までしか見てないから5、6年つて言つただけで。どうこうことなんだ?

「お、話は終わったのか?」

「う、うん

「それじゃあ、またやひひせー。」

抱いた疑問の解答を考えようとするが、仮説は立てられてもそれが答えとは限らないわけで……もう一度茜さんに聞く必要があるな。うーん、女子に学校の用事以外で声をかけるなんて初めての事だから、どう声をかければいいのかさっぱりだ。

とにかく彼女が一人になつた時にも声をかけよう。人に聞かせられる話じゃないからな。それから俺は十代とデュエルして1日を過ごした。暗黒界を使って十代とは3勝3敗となかなかの戦績だつた。やっぱりZEROは厄介過ぎる。まあ、グラファで先に破壊しちゃえば被害はあんまり無いから影響は少ないんだけど……さつそくあ

げたD・D・クロウにグラファを除外された時は困った。

まあ、除外対策に闇次元の解放入れてたからなんとかなったが。それにしても十代はフレイム・ウイングマンが好きだな。T ORNA DOを融合召喚してからミラクル・フュージョンで出してくるし。

3敗の内2敗はフレイム・ウイングマンにトドメを刺されて終わった。またデュエルをしようと約束を交わして俺は自分の寮に戻った。

十代とデュエルしてから一週間……デュエルアカデミアに入学して初めての月一テストの日になつた。まずは筆記試験があり、午後に実技試験が行われる。午前の筆記試験はデュエルの知識を試すテストと高校の基本科目を休み時間無しでやり通すものだつた。

トイレの場合は教科一つ終わらせた時監督の先生に自己申告すれば行かせてもらえる。テストが途中の時にに行くと、それまでやつていたテストはそこで回収される。カンニング対策だ……それだったら休み時間を作ってくれた方が助かるんだけどな。

かくいう俺は朝にばつちり行つたからテスト中に行かなくていい。

テストも順調だ。やや現国と数学が心配だが、大丈夫だろう。平均点は取れるはずだ。さて、テストに集中したいが気になつてゐる事がある。それは十代が来ていないつて事だ。テスト時間が後半分になつてもやって来ない。

もしかしなくとも寝坊したんだろうな。同室の翔は自分の席でぐーすか寝てるし。心配は心配だが、それで自分のテストが疎かになつちや本末転倒。きつちりしつかり書き終えないとな。

それから俺は順調にテストを処理していき、最後のデュエルに関するテストのラスト問題を書き終えペンを置く。と、ちょうどその時に教室のドアが開いて十代が知らないオシリスレッドの生徒と一緒に入ってきた。テストを裏にしてから軽く……監督の大徳寺先生に気付かれないように周囲を見渡せば、空席が2つあった。

一つは十代の席としてもう一つはそのレッド生のものだろう。しかし、十代もそのレッド生も大丈夫か？ 周りを確認するついでに時間見ただけど、後15分しかないぞ。それから少し……2分くらいしたら十代はいびきを掻いていた。……おい。

もう一人のレッド生はかなりの速さで腕を動かしていて、短い時間で数をこなそうとしていた……十代、彼を見習おうぜ。それから十代は……と十代に一度起こされていた翔も十代と一緒に試験が終わるまで眠つていた。さすがに試験中に起こしになど行けるわけがない。なので俺は試験が終わった後に声をかけた……大地と一緒に。

「お～い、十代に翔。試験終わつたぞ」

「ハッ！？ やつひまつたい……」

翔は起きた途端に涙を流し始める。泣くくらいなら意地でも起きてようよ。まあ、落ち込むだけいい方か……十代は。

「ま、なんとかなるだろ」

あつけらかんとして気にしていない。……はあ。

「といひでみんなはどこ行つたんだ？」

「ああ。みんななら購買に行つたよ。午後の実技のために、昼から新パックが発売されるみたいだからね」

「やうなのが、三沢」

「間違いないよ」

大地が十代の疑問にさらさらと答える。だからみんなないのか……新パック発売するなんて知らんかった。いや、みんなではないな。何人かはまだ教室に残ってる。茜さんに……十代と一緒に遅れてきたレッド生。後はブルー生徒がちらほらと……茜さんを除けばどうもこいつも俺達を注視、つてもしかしてこいつら同類？

あ、十代主人公だった。もしかして、俺が忘れてるだけで原作であつたのかこの場面……うわあ、だつたら俺も同類だつてバレたなこりや。まあ、いいや。こうなりや、毒を食らわば皿までだ。俺が読んでた二次だと、こいつの場合田障りで排除か勧誘のどっちかだろうし、腹を括るわ。

……一次みたいに魔法やら小宇宙やら電気鼠みたいな能力者、いないといいなあ。そんな風に淡い希望を願つていると、どんな話をしていたのか。

「翔、勝利。見に行くぞ」

「うっス！」

「あ、うん。つてビーハー？」

どこに向かうみたいだった。つい同意しあがつたけど、慌てて場所を確認する。

「購買だよ。新しいカード見てみたいからな。勝利もそうだ？」

「あー、確かに気になる。それにどっちみち昼飯のために購買に行かなきゃいけないんだしな。」

「当然行くよ。昼飯も買わなくちゃいけないからね」

「なら俺も行く」

「おー、三沢もだな。じゃ、しうつぱーつー！」

俺、大地、翔、十代の4人で購買に向かう。ん~、今日は何を食べようか……昨日はチョコロロネだったから、今日は焼そばパンとドローパン2個だな。今日は十代より先にタマゴパンを引き当てやる！

結局、購買に行つたはいいがある生徒が新しいパックを買い占めてしまったつた1パックしかないと購買のお姉さんが申し訳なさそうにしていた。その最後のパックを十代は残念がる翔に譲ると言つ。それに翔が感動していると購買のおばちゃんがやつてきて新しいパックを1つ十代に差し出してきた。

2人は知り合いだつたらしく、十代は何をしたのか。おばちゃんは2パックだけ残していくくれたようだ。1パックを十代に、もう1パックはもう一人の子に言つていて俺や大地、翔は首を傾げたが……。

「天鳳院疾風つて同じ寮の奴でさ。俺と同じく寝坊したみたいで、一緒にとめさんを手伝つたんだよ」

ああ、一緒に遅れてきたレッド生ね。なるほど。納得する俺達に十代は呑気にその天鳳院とデュエルしたいな、と言つていた。十代らしいやあらしい反応だ。それから俺達は昼飯を買って、晴れ晴れとした空の下で腹ごしらえを整えた。

結果から言おう。ドローパンはまたしても十代に引き負けた。俺が引いたのはキムチパンとメンチカツパン。いや、美味しいんだけど

ね、キムチも意外とパンに合うし。ちなみに翔はハバネロパンだった……ご愁傷様である。大地も付き合いでドローパンを買つたが中身が無かつたのは予想外だつた。

初めてのドローパンがそれだと可哀想だつたので、メンチカツを半分にしてあげた。全部あげないのは逆側を俺がかじつたからだ。そうして午後の試験の時間になるまで有意義な昼飯を過ごすのだつた。

・・・・・

そして、実技試験。体育館で寮別に12人同時に試験をこなす。俺の番はまだなので、試合を見てみよう。

「大将軍 紫炎でダイレクトアタック！」

「うわああああああつ！？」

赤い戦鎧を着た武者を召喚して勝負を決めたピンク色の髪の勝ち気  
そうな女の子に……。

「フフ、イビリチュア・テトラオーグルでダイレクトアタック

海獣みたいなモンスターでトドメを刺す藤原さん。六武にリチュアかあ。どっちも強力だよな……リチュアはTF6で初めて存在知つたけど、一応六武は持つてるからその恐ろしさはよくわかる。見た感じ六武の方は真六武は入つてないみたいだな。

まあ、真六武つて確かにシンクロが出てからだつたから仕方ないか。リチュアはいつ出たのか知らないけど、儀式が中心だから元々あつた可能性があるしな。

「僕はスーパービーコロイド ジャンボドリルで守備表示のルイーズに攻撃！ その瞬間、僕はリミッター解除を発動！」

「そ、そんなん！？」

おおっ、翔は俺があげたモンスターを使って勝つた。あげた甲斐があるつてもんだ。よしよし。他はと見渡せば茜さんの姿が目に入つた。

「クリッチーでローガーディアンを攻撃！」

「くつ！？ リバースカードオープン、リビングデットの呼び声！ オラは墓地から千年原人を召喚するつチ！ これでオラの勝ちつチ！」

確かに茜さんのライフは500。クリッチーが千年原人に破壊されたらそこで終わりだろう。ただ、茜さんが使つてるのは魔法使い族で手札が4枚ある。あのカードとモンスターがいれば……。

「甘いわね。私は速攻魔法、ディメンション・マジックを発動するわ。自分フィールド上に存在するモンスター1体を生贊にし、手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚するわ。さらに特殊召喚した後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。私はブリザード・プリンセスを特殊召喚して千年原人を破壊」

「そんなあ～」

「ブリザード・プリンセスでダイレクトアタック！」

無事に彼女は勝てたみたいだな。俺がフィールドから降りる彼女を見ていると、茜さんは俺が見ている事に気付いたのか笑顔で手を振

つてきた。それに俺が応えると……ゾクッと悪寒がして、その方向を見ればブルー男子にすごい睨みつけられていた。怖つ！？ いや、ブルー男子以外にイエロー男子からも睨まれ……うん、場所移動しよう。十代のとこならまだ大丈夫だよな。

が、移動する前にどうどう俺の番になつたらしく呼ばれた。対戦相手は……なつ！？

「ふん、この時を待つていたぞ。雑魚が」

「丸藤……翔壱」

そう。あのアンティデュエルの夜に十代のデッキを奪い、シンクロを使つてきた翔の兄であり……茜さん曰わく転生者の一人。こんな衆人環視の前で戦う事にならうとは。

だが、違う寮生同士で戦うのは俺だけじゃなかつた。十代は万丈目とデュエルするらしく隣のフィールドに上がつていた。

「勝利、負けんなよ。俺も負けねえからよ」

と、不敵な笑み付きで話しかけてきた。クロノス先生がなんか言つてるが、勘弁して欲しい。なんか十代はイエロー昇格、俺はブルー昇格つて話になつてるが俺はブルーには上がりたくない。翔壱みたいな転生者が闊歩する魔窟になんぞに誰が喜んで引っ越すのか。

はあ。周りは盛り上がつてゐるし、ここで俺が断つたらKYYと思われて孤立しそうだな。いやだぞ、そんな真っ黒な学校生活なんて。それに嫌な理由はこいつ……翔壱相手に同じデッキで挑むことだ。絶対対策されてるから勝ち目が薄すぎる。今持つてるのは暗黒界と闇属性戦士族で固めたデッキ。

安定性で考えたら暗黒界だ。闇属性戦士は結構安定性に欠ける。いや、まあ、それでも結構強いんだよね……回れば。速攻かスロースターターか。まあ、答えは決まつてゐるか。

「その話受けます。十代、そつちも負けるなよ

「もちろんだ」

十代と少し話してからそれぞののフィールドに向かい俺は翔壱と対峙する。ニヤニヤと気味悪く笑う姿にげんなりする。

「我に刃向かつた愚かな雑魚によつやく罰を下される事ができる。大観衆の前で不様に地に這い蹲る様を見られると考えるだけで我が美顔が緩んで仕方ないわ」

美顔て……凄まじい自信だな。というかそれって弟の翔も美形って言つてるようなもんだぞ。チラリと翔を見れば水色の髪がちょこんと客席から覗くだけで本人の顔はしゃがんで見えなかつた。恐らくこんな衆人環視で美顔なんて言われたから恥ずかしかつたんだな。

まあ、同じ顔だしな。ツツ「みはすまい。俺がなんと言おうと僻みや妬みと取られるだけなのは考へるまでもない。自分の事を俺は太つてて見苦しいと自覚している……その事で色々あつたからな。

そんな苦い過去は忘れて、今はデュエルに集中しよう。翔壱が暗黒界に対してどんな対策をしてきたのか……ナチュル系だつたら最悪だな。まあ、なるようになれだ。

「シニヨール高峰とシニヨール丸藤のデュエルを始めマスー。いいですか？」

「つむ」

「はい」

クロノス先生は俺達に確認した後、十代と万丈目の方も確認して領  
き。

「でーハ、始めてくださいーノ！」

『デュエルっ！』

俺と十代、万丈目と翔壱は声を揃えてデュエルの開始の合図を叫ん  
だ。

## TURN - 05【類似存在との初回シナジー】（後書き）

月一テスト始まります。次回は『ユエル回』です。

あと素朴な疑問が、他の作品覗いたけど、今日の最強カードとかやつた方がいいのだろうか？

TURN - 06【華麗なる狩人】（前書き）

月一テスト。丸藤翔壱 VS 高峰勝利です。

どう。

『デュエルっ！』

ふん、よもや我が塵芥風情に頭を下げなければいかんとはな。甚だ度し難い。遊城十代ごときに敗北した塵芥にな。我が頭を下げなければならなくなつた元凶には派手に不様に叩き潰してくれる。

「先行は我だ。ドロー！ 我は打ち出の小槌を発動。発動しているこのカードと手札を任意の枚数選択し、デッキに戻しシャッフルする。その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。私はこのカードと手札2枚を戻し3枚ドロー！」

だが、このカードを手に入れられただけ塵芥に頭を下げただけはある。よし、来たな。

「私は手札より次元の裂け目を発動。このカードが存在する限り墓地へ送られるモンスターは除外される。さらに私は異次元の生還者

を攻撃表示で召喚し、2枚伏せてターンエンドだ

「俺のターン、ドロー」

くくく、奴のデッキは暗黒界。除外してしまえばなんら脅威ではない。対策のカードは入れているだろうが、我が伏せたのは封魔の呪印と魔宮の賄賂……どちらも裂け田を守るカードだ。

「俺は暗黒界の騎士 ズールを召喚し、暗黒界の門を発動！」

ほう、生還者を超えてきたか。この状況ならば門などダークゾーンの劣化カードに過ぎない。が、悪魔のみを強化するため生還者の攻撃力はズールに負ける。

「暗黒界の騎士ズールで生還者に攻撃！」

「裂け目の効果で生還者は除外される」

「……俺は2枚伏せてターンエンドだ」

「」の時、除外された生還者を特殊召喚する。このカードは表側表示で除外された場合、エンドフェイズ時にフィールドに特殊召喚さ

れる効果を持つ

裂け目を使った定番のコンボだ。裂け目をどうにかしない限り私は生贊に困る事はない。さて、我的ターンだ。

「ドロー。私は生還者を生贊に邪帝ガイウスを召喚。ガイウスの効果、このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在するカード1枚をゲームから除外する。私はズールを除外……この時、除外したカードが闇属性モンスターだった場合、相手ライフに1000のダメージを与える」

「くつ……」

「食らうがいい。私は邪帝ガイウスでダイレクトアタックだ！」

ガイウスは悪魔族、よつて門の効果で300攻撃力が上がつて2700だ。効果ダメージと合わせて3700。圧倒的じゃないか私は。

「ガイウスの攻撃宣言にトラップ発動！ 炸裂装甲！」

「甘いわ、戯けが！ カウンタートラップ、魔宮の賄賂を発動！ 魔法・罠の発動を無効にし破壊する。効果適用後相手はカード1枚

ドローするがな！」

「ぐう、つー？」

ふん、男の悲鳴なんぞ耳が腐るだけだが耐えられるのはつまらん。不様に情けない悲鳴を上げて我を楽しませる気概はないのか……実につまらん雑魚だ。

「ハンドフェイズ、異次元の生還者を特殊召喚する」

「俺のターン、ドロー。俺は暗黒界の番兵レンジを守備表示で召喚し、1枚伏せてターンハンドだ」

「くつはつはつはつは！ どうしたどうした！ 成す術無しか！ 我のターン、ドロー！ 我は生還者を生贊に光帝クライスを召喚。このカードが召喚、特殊召喚に成功した時フィールド上に存在するカード2枚まで破壊する事ができる。破壊されたカードのコントローラーは、破壊された数だけドローできるがな」

本来ならこのターンで決めたかったが、前のターンで伏せられたカードは危険な気がする。万全を期すために……。

「我が破壊するのは伏せられたカード2枚だ！」

「くつ、俺はクライスの効果で2枚ドロー！」

あつたのはミラーフォースか。この選択は間違つていなかつたようだな……だが、なんだ？ 奴のあの顔は……暗黒界の持ち味を封じられた癖に諦めていないだと？

ふざけおつて。貴様がしていいのはそんな胸糞悪くなる顔ではなく、我を怖れ絶望する顔だけだ。我的平静のために次のターンで絶対に潰す！

「私はガイウスでレンジを破壊しターンエンド。そして、生還者を特殊召喚だ」

私は奴の顔に苛立ちを覚えながら異次元の生還者の効果を発動した。

十代君は原作通りに万丈目君とデュエルするのはクロノス先生のパック買い占めで予想できていたけど、高峰君があの馬鹿とデュエルするなんてね。

お姉ちゃんから聞いた話だけど、無駄にプライドの高いあの馬鹿の事だから根に持っていたんだわ。

「彼、もう駄目ね」

「明日香、本当にあの坊やが勝つたってほんとなの？」

「ええ。でも、彼の使っているモンスターは墓地に捨てられる事で効果を発揮するから。墓地を封じられてしまつたとなると、ね」

お姉ちゃんと雪乃さんが話している。確かに暗黒界は墓地依存モンスターだ。除外されてしまえば能力は発揮できない。ゴルドやシルバ、レインも除外されてしまえば意味がない。あのフィールド魔法は知らないけど、主力は変わらないはず。

それに生贊を揃えようにも、ガイウスや生還者で破壊されてしまえば手の出しがない。あの馬鹿に勝たれたらますます調子に乗るだろうから、高峰君に勝つて欲しいけど。私だってあれを突破するのは難しい。あの馬鹿が光帝クライスの生贊にした生還者を特殊召喚した時、傾いていた秤が動いた瞬間だつた。

「異次元の生還者が特殊召喚された時、手札からモンスター効果を発動！」

「な……に？」

クライスを召喚されてミラーフォースを破壊されたのはヒヤッとしたが、クライスのお陰で打開できるモンスターを引けたのは結果才一ライだ。

「俺は闇の取引を捨て力オスハンターを特殊召喚する。このカードは相手がモンスターを特殊召喚した時に手札を1枚捨てるごとにこのカードを手札から特殊召喚する。さらにこのカードがフィールドに存在する限り相手はカードを除外できない！」

「攻撃力2500のモンスターを特殊召喚だと！？」

そう力オスハンターは攻撃力2500の悪魔族モンスター。門の効

果で2800となり同じ門の効果を受けたガイウスを超えた。

「そして、俺のターン、ドローー！」

「引いたカードは手札抹殺……残りは暗黒界の雷とスノウ。あの伏せカードが気掛かりだな。」

「俺は暗黒界の雷を発動し、相手フィールドに伏せられたカードを選択する！」

「させるか。私は封魔の呪印を発動。手札の打ち出の小槌をコストに雷をこのデュエルで使用不可にする！」

「雷を使って正解。破壊できたら御の字程度だったからな。本命は……」

「ならば手札抹殺を発動！ 手札抹殺で墓地に捨てられたスノウの効果！ 俺はデッキから……」

手札抹殺で引いたカードは暗黒界の取引……ならサーチするカードは。

「暗黒界の龍神 グラファだ！ そして、手札の暗黒界の取引を発動！ 一枚ドローして一枚捨てる。俺が捨てるのは当然グラファだ！」

「くそつ！？」

「グラファの効果で俺はガイウスを破壊！ さらに門の効果でスノウを除外し、取引で引いた暗黒界の狩人ブラウを捨て門の効果でドロー！ さらに捨てられたブラウの効果でもう一枚ドロー！」

引いたカードはベージと取引か……まずカオスハンターでクライスを破壊して400。ベージで生還者破壊して100、グラファでダイレクトアタックして3000。全部で3500のダメージだ。いんかん、200足りない。こんな衆人環視の中でシンクロなんて使わないと思うが……もしもあるからな。このターンで決めるべきだ。となると召喚権は残しておいた方がいいだろうな。ゴルドとシルバが引ければ……よくてズールかブロンだな。

「俺はもう一度暗黒界の取引を発動……ドロー！」

来たのは暗黒界の騎士ズール。これなら、よし。

「俺は暗黒界の尖兵ベージを捨て、ベージの効果。このカードが他のカードの効果で墓地に捨てられた時フィールドに特殊召喚する。さらに墓地の暗黒界の龍神グラファの効果。暗黒界の龍神グラファ以外の暗黒界と名のついたモンスターを手札に戻す事でこのカードを特殊召喚する」

「くつ、だが、ベージを召喚しても我のライフは200残る。次のターンになれば……」

「！」のターンで終わりだ！　俺は手札から暗黒界の騎士ズールを召喚！

「な、なんだとおつ！？」

驚愕を露わにするあいつに俺はビシッと指を突きつける。どうせならトドメは逆転のキーカードでやるか。

「グラファで光帝クライスを、ズールで生還者を……カオスハンターでダイレクトアタック！　カオスウェイプ！」

名前が安直だろ？と武器が鞭なんだから仕方がない。クライスはグラファのブレスで蒸発し、生還者はズールの剣に斬り捨てられ……カオスハンターの道を作る。その道をカオスハンターは身を低くして突破し、鞭を丸藤翔壱めがけて振り下ろす。地面が砕けるエファクトと共にアイツは膝をついた。

と、その時。

「フュザーマンでダイレクトアタックだ！ フュザーブレイク！」

「ぐあああああああつ！？」

すぐ隣から十代の元気な声と万丈目の悲鳴が聞こえた。どうやらあつちも決着がついたみたいだ。こつちのデュエルに集中していくどんなデュエルしてたのかさっぱりだ。それだけ危なかつたんだから仕方ない。もしカオスハンターを引いていなかつたらあのまま何も出来ずに終わっていた。

ソリッドビジョンがデュエル終了と共に消えていく。あ、これで俺には除外が有効だつて知れ渡つちゃつただろ？、デッキをちょくちょく変えてしないといいカモだな。

そりいえば大地が複数の「テッキ」を運ぶのに良さそりなの持つてたな。  
どこで買えるか聞いてみよう。勝てた事に安堵しているとポンと肩  
を叩かれ、そつちを見ると。

「危なかつたな、勝利」

「ああ、十代か。うん、マジで危なかつた」

十代が笑顔で俺のすぐ横に立っていた。まあ、負けても不思議じゃ  
なかつたしな。この後、校長先生に俺と十代は揃つて昇格と宣言  
された。いや、まあ、誉められるのは嬉しいんだけど、魔窟になん  
て行きたくないんだが……辞退できるか聞いてみよう、うん。

高峰君があの馬鹿に勝つたのはよかつたけど、カオスハンター?  
龍神グラファ? 私はあんなカード知らない。

『どうかしたの、茜ちゃん』

「おへつねみち」

青い長髪の半透明な少女が話しかけてきた。彼女は私の精霊、憑依装着・エリア。高峰君と私を交互に見比べて不思議そうな顔をする。

『何かあの子で気になる事でも?』

「まあね。私の知らないモンスターだつたから……」

『西ちゃんが知らない? え、どうして?』

エリアには私が転生者だつて事を教えてある。それに生前でのこの世界についても。カードゲームの精霊であるヒリアにとつたりどうでもいいらしく軽く流されてしまつて、もう引かれてると思っていたのだけれど、この様子だと覚えていたみたいね。

「……全部のカードを知ってるわけじゃない。けど周りに暗黒界や悪魔族を使う友達がいたから、あのカテゴリーで知らないモンスターは少ないはずなんだけど……」

あんな強力な効果なら使わないはずないんだし……悪魔族使う友達は女性型の悪魔族を集めるのも好きだったから、あのカオスハンターは絶対に手に入れようとするはず。自慢するのも好きだったから私が知らないってのも変だ。

『西ちゃん。あの子も西ちゃんと同じなんだよね?』

「ちよっと違うナビ、まあ、同じね」

『でも、あの子。西ちゃんとは違う事言つてなかつた? 西ちゃんは半年つて言つてたけど、あの子は5、6年前だつて』

そういうえばそつね。あの時は気にしなかつたけど、あれが本当なら私が知らないカードを持つてもおかしくない。これは詳しく聞いた方がいいわね。

同じブルーになる事だし、今日から入寮するだろうから後で聞きに行こう。この時の私はそつ疑わずに試験が終わつた体育館を後にした……けれど。

「どういう事かな?」

「いや、どうこう事つて言われても……」

「どうして昇格を辞退するの？ 聞きたい事があつたから男子寮の近くで待つてたのに、全然来ないんだもの」

ブルーの男子寮の寮長に声をかけられなかつたら待ちぼうけよ。その時に寮長に注意もされたから散々だわ。

「丸藤翔壱と同じ寮はちょっと……。無駄にプライド高そうで、今日たくさんの人前で倒したから恨まれてると思つ。寮内でも睨まれ続けるのは正直勘弁して欲しい」

あの馬鹿ならそつね。私だつて悪意を持つて睨まれ続けたら気疲れしちやうわ。でも、それなら事前に教えて欲しかつた。

「それに……天上院さんが前言つてたわんさかいる転生者。ほとんどブルーだよね？」

「ええ、そつよ。あれ？ 私、教えてつけ？」

「あー、今日の晩。俺、十代に話しかけてたでしょ。その時に教室に残つてたブルー男子数名に注目されてたから」

あの時ね。確かにあの時に教室に残つてたのは私が知る転生者ばかりだったわね。多分、朝十代君と遅れてきたレッド生も。

「もしかして、それが理由で辞退したの？」

「うん。十代と仲が良いって知られてるし、邪魔な存在つて事で何かされそうだからね」

確かにあの馬鹿共ならしでかしそうね。まあ、いいわ。私が彼と同じ立場なら同じ事してたでしょうし、本題に入らないと。

「辞退について理由は分かつたからもう何も言わないわ。聞きたい事があつて来たんだからそつち優先したいし」

「あ、そうだ。俺も聞きたい事があるんだつた」

「やう? でも、まず私からね。高峰君は原作を見たのが6年前つてホント?」

「うん、本当だよ。正確には一期を見たのが、だね。5D-Sも最終回を迎えて新しい遊戯王のアニメがやってたと記憶してるよ」

つまり高峰君は私が生きていた頃よりも未来からやつてきたのね。まだ私が生きていた頃は5D-sが始まって半年しか経っていないから。これで私の知らないカードを持つてる理由になるわね。なんせ私が亡くなつた後の人なんだから。

「で、高峰君の聞きたい事つてなに?」

「天上院さんと同じだよ。半年しか経つてないつて言つてたから」

『「つんづん、普通は気になるよね』

うつせいいエリア。つとこで私は気付いた。高峰君の真横にエリアがいるのに気付いた素振りなんてない……つまり高峰君には精霊を見る力がない事が。

『「うーん、茜ちゃんと同じだから見えると思つてたんだけどなあ』

エリアが高峰君の目の前に移動して何かしてるけど……見えないからつてやめなさい。あなたのせいで私は高峰君が見えないんだから。

「どうかした？」

「ううん、何でもない。気になる事も聞けたし、そろそろ戻らないといけないから、またね」

「うん、気をつけ」

危ない。エリアのせいで顔に出ていたみたいね。私はエリアのせいで見えなかつたけど、エリアが見えない高峰君からは私の顔が見えたでしょうし。ほら、エリア帰るわよ。

『はーい』

「またね、高峰君」

「うん、またね」

私はイエロー寮の近くの林から出て女子寮に戻る。林で話してたのは女子である私が男子寮であるイエロー寮に入ると何かと問題があるから。

ブルー男子寮の寮長に高峰君が昇格を辞退した事を聞いてPDAを使って呼び出した。聞きたい事も聞けたし、十代君の敵になる可能性もないだらうから安心かな。

『茜ちゃん、『机嫌だね』

「ナニ?」

『「さ。十代君のお喋りしてん次ぐらこで』

そこまでなのね。まあ、まともやうな人だからでしょ? 今まで会つてきた転生者はどこつもこつも色情魔だつたし……しかも、お姉ちゃんと私を間違えたかと思つたら胸を見て納得するんじゃないわよ。

『あ、茜ちゃん。落ち着いて! 顔が怖いよつ! ?』

「あ、あら。『めんね、ヒリア。他の奴らの』と黙こゑつて、ムカムカが……」

ふう、ダメね。前世に胸が小さかつたから今でも引きずつてゐるわ。

でも、前世よりは大きいのよ？前世なんてほんとに無かったんだから。今はじはあるもん……お姉ちゃんより小さいけれど。

じつは双子なのに、大きさでこんなに差があるのかしづ。私は自分が育えた事に落ち込んで、ヒロアに励まされながら寮に戻った。

## TURN - 06【華麗なる狩人】（後書き）

今回の翔壱の「デッキは次元帝です。

暗黒界は墓地必須ですから誰でも思いつける対策ですね。まあ、誰でも思いつける故にそれに対する対策は仕込んでありますけど。

カオスハンターがそれになります。まあ、手札で腐る事が大半なんですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2048y/>

遊戯王GX-お気楽小僧の決闘者生活-

2011年11月24日17時53分発行